

日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER



No.132
2013/7/28

目次

会長就任にあたって.....	2
公開講演会の開催.....	3
第4回中東研究世界大会（WOCMES4）への参加について.....	4
第10回AFMA大会開催、報告募集のお知らせ.....	5
第30回日本中東学会年次大会の開催について.....	6
理事会・総会報告.....	6
第29回年次大会報告.....	14
【大会プログラム】.....	14
【公開シンポジウム】.....	18
【公開イベント：講談】.....	19
【研究発表会場から】.....	19
【大会を終えて】.....	37
【大会決算】.....	39
AJAMES 編集委員会報告.....	39
第4回日本中東学会奨励賞の選考結果.....	41
「片倉もとこ先生を偲ぶ」.....	42
会員の異動.....	43
寄贈図書.....	43
事務局より.....	44
編集後記.....	44

会長就任にあたって

栗田禎子

ひよんなめぐり合わせで、第15期の会長を務めることになった。会長は理事会での互選で決まるのだが、今期はたまたま理事の多くが職場や学会で責任の重い立場にあり、結果として一番暇そうな人間が引き受ける羽目になったのである。ピンチヒッターとしての登板なのでたいしたことはできないが、見識に富む理事各位の知恵を借り、山口事務局長率いる有能な事務局スタッフの力を頼って、何とか役目を果たしていきたいと思う。

知的刺激と楽しい創意に満ちた今年5月の大阪での大会（実行委員会のご尽力に心から感謝する）は、第29回（！）大会であった。来年はいよいよ30回大会（会場は東京国際大学）というわけで、1985年に設立された中東学会は節目の時期を迎えつつある。そう言えば近年、時の流れを感じさせられることが増えた。私が専門とするアラブの歴史・社会関連の分野に限っても、ここ1～2年の間に中岡三益氏、またごく最近では（われわれの世代の、特に女性研究者にとってはきわめて大きな存在だった）片倉もとこ氏といった、かけがえのない先輩が去って行かれた。しかし、学会としては、「30歳」はまだまだ若いと言える。第15期（2013～2015年）は日本の中東研究のこれまでの30年を振り返り、その上で次の30年を展望する時期になることだろう。

この30年間に、中東と日本を取り巻く状況は大きく変わった。中東とはといえば、「冷戦」体制崩壊後の国際政治の激変の中で、1990年代以降、大国によるむき出しの軍事介入の対象となり、戦争・占領という辛酸を嘗めてきたが、ここへ来て中東の人々は立ち上がりつつある。2011年のチュニジア、エジプトでの革命、さらには最近のトルコ、イラン等の状況を見てみると、現在、中東の民衆は、さまざまな困難に直面しつつも、今日の世界を覆う重苦しい閉塞状況を打ち破る「前衛」的役割を果たすようになっていのではないかと感じる。

他方、日本ではこの30年にアメリカの世界戦略への追随、政治の保守化が急速に進行し、それと表裏一体の問題として（アメリカの戦争の潜在的標的である）アジア・アフリカ・中東等の地域をめぐる認識が歪んでしまう、という現象が生じている。イスラームや中東に対する無理解をさらけ出した猪瀬東京都知事の発言は、その一例であろう。それどころか最近の日本政治を見てみると、「武器輸出三原則」骨抜きの手始めとしてイスラエル向けの戦闘機（F35）生産に着手する、「3・11」で「安全神話」が崩壊したはずの原発の輸出先としてトルコやヨルダン、アラブ首長国連邦にねらいを定めるなど、国内でも議論が分かれるような重大な政策（憲法や原発）を、むしろ中東を突破口にする形で強行しようとする動きさえあるようである。このような状況で日本の中東研究者は、気づいてみれば、きわめて難しい立場に置かれつつあるのではないだろうか。また、「経済効率」「市場原理」万能の「新自由主義」の下での大学の疲弊、学問や知識人の委縮の傾向も著しい。

こうした状況を打開し、新たな展望を切り拓くにあたっては、やはり何よりも、こ

れからの日本の中東研究を担う世代の研究者のエネルギーに期待したい。若い研究者には、これまで以上に積極的に中東に足を運び、資料を収集し、曇りのない目で社会を観察してほしい。（中東全域が数十年に一度とも言える変革の渦中にある今は、またとない、稀有な時代なのである！）今の中東で学べることは一生の財産になるだろうし、研究や調査の中で出会う人々は一生の友人になるだろう。

また、国際的な協働・連帯の強化も、日本の中東研究の健全な発展を保証する重要な要素である。これには当然、中東の研究者との交流も含まれるが、それと並んで特に大切なのは、中国・韓国をはじめとするアジアの中東研究者との交流・対話である。先に触れたような近年の日本政治の右傾化の結果、東アジアの隣人たちとの関係はこじれ切ってしまったが、アジアの研究者たちと中東という共通の研究対象について議論・協働する過程で、われわれの世界認識・歴史認識を鍛え直し、ひいては今後の世界における日本の立ち位置を見定めていく、といったことも可能なのではないか。2014年8月にはアンカラでWOCMES（中東研究世界大会）が、そして12月には京都でAFMA（アジア中東学会連合）の大会が日本中東学会が幹事となって開催されることになっている。また、中東学会発足当初から日本語だけでなく多様な言語での発信の場として位置づけられてきた『日本中東学会年報(AJAMES)』も、国際的発信・対話の場としてますます重要性を増している。

洞察力を磨き、中東の友と語り、国際的連帯を広げながら、先輩たちに負けない、個性的で志の高い研究を展開していきたいものである。

日本の中東研究の今後の30年に幸あらんことを！

公開講演会の開催

日本中東学会第19回公開講演会を下記の通り開催いたします。

「参詣と巡礼ー日本と中東イスラーム世界」

日時 2013年10月27日（日）10：00ー16：00（9：30開場）

会場 愛媛大学（城北地区）南加記念ホール

〒790-8577 松山市文京町3番

日本中東学会では近年、首都圏だけでなく全国各地で公開講演会を開くことを意識的に追求してきましたが、今年は、愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会の協力を得て、愛媛県松山市で公開講演会を開催します。

中東イスラーム世界における参詣と巡礼は人々の間に深く根付いた慣行であり、この地域の社会と文化、さらには人々の価値観を理解する上で重要な意味をもっていることは周知の通りです。本公開シンポジウムは、この点をふまえた上で四国巡礼との比較の要素を加えることにより、参加者のみなさんになじみのある視点から参詣や巡礼について考えていただくことをめざします。四国遍路をはじめとする日本の事例や観念と中東イスラーム世界のそれとの比較を通して、参詣や巡礼を行う人々の心性や

こうした慣行の社会・文化的な意義について広く議論されることを期待しています。

プログラム

- 10:00 開会挨拶と趣旨説明
- 10:20 胡光 (愛媛大学法文学部准教授) 「「道中記」に見る四国、その内と外と」
- 11:15 守川知子 (会員・北海道大学大学院准教授) 「シーア派の聖地巡礼—イラク、イランの聖墓参詣を中心に」
- 12:10~13:00 昼休み
- 13:00 近藤浩二 (滑川市立博物館主任) 「越中からの四国遍路—「道中小遣留帳」を素材に—」
- 13:55 齋藤剛 (会員・神戸大学准教授) 「モロッコの聖者崇拜と参詣—文化人類学の視点から」
- 14:50~15:05 休憩
- 15:05 パネルディスカッション
- 15:50 閉会挨拶
- 16:00 閉会

なお、講演のタイトルについては変更があり得ることをご了承ください。確定次第、学会ウェブサイトでお知らせします。

*一般公開・無料

問い合わせ先 日本中東学会事務局
〒150-8938 東京都渋谷区広尾4-3-1
聖心女子大学 山口昭彦研究室内
Tel: 03-3407-5685
e-mail: james@james1985.org

第4回中東研究世界大会 (WOCMES-4) への参加について

2002年マインツ (ドイツ)、2006年アンマン (ヨルダン)、2010年7月バルセロナ (スペイン) に引き続き、2014年8月に、第4回世界中東研究大会 (The Fourth World Congress for Middle Eastern Studies: WOCMES-4) がアンカラ (トルコ) で開催されることになりました。

JAMES では、過去3回の WOCMES において、国際交流基金の助成をえて日本の中東研究の発信と交流のため、学会としてパネルを組んできています。今回も、国内にある様々なプロジェクト等と連携しつつ、パネルを組織し、国際交流基金への助成申請を予定しています。

大会は、2014年8月18-22日にアンカラにある中東工科大学 (Middle East Technical University: METU) を会場に行われます。第一回大会から継続されてきた大会の研究テ

ーマに関しては、WOCMES-4 のホームページ <http://www.wocmes2014.org/> をご覧ください。参加登録に関する手続き等は9月15日以降から始まる予定です。すでに5月末にMLにて、JAMES としてのパネル組織のご提案をよびかけており、締切間近となりました。ご希望の方は、7月末までに日本中東学会事務局宛にご連絡ください。また本件についてのご質問がありましたら、国際交流担当理事にご連絡ください。

(国際交流担当理事 江川ひかり)

第10回アジア中東学会連合 (AFMA) 大会開催、報告募集のお知らせ

2013-14年、日本中東学会はアジア中東学会連合 (AFMA) の幹事学会となりました。

AFMA では、二年ごとに幹事学会が大会を主催することとなっておりますので、前回2012年のAFMA大会 (韓国中東学会主催、於釜山) に続き、日本中東学会主催のAFMA大会は2014年に実施することとなります。

そのAFMA大会開催の概要が下記の通り、決まりましたので、ご報告いたします。

日時：2014年12月13-14日 (土、日)

場所：京都大学 時計台記念館 (予定)

大会テーマ：De/Re-constructing Middle East Studies from Asian Perspectives: Towards the 20th Anniversary of the AFMA

AFMA については、<http://mideast.site90.com/afma/> をご参照ください。

1. 大会実行委員長は、岡真理会員 (京都大学)、実行委員は北澤義之会員 (京都産業大学)、帯谷知可会員 (京都大学) にお引き受けいただきました。また、実行委員には過去AFMA大会参加経験のある若手会員から積極的に協力のご意向をいただいています (委員会の構成は確定次第、お知らせします)。

皆様のご協力に、心より感謝いたします。

2. 上記AFMA大会には、積極的に会員の参加・報告発表を以下の日程で呼びかけます。テーマには、会員の報告である限り特に制約を設けません。

報告題・報告要旨 (簡易版) 提出締め切り：2013年11月29日 (金)

報告者氏名、所属・職名、報告題、報告内容要旨 (簡易版、日本語400字ないし英語300ワード程度) を記載の上、afma2014kyoto@yahoo.com までメールでお送りください。

注：大会開催のための助成金申請のために、必要な情報です。そのため締め切りが早くなっていますが、申請後、改めて大会プログラム企画のためにより詳細な英文での要旨の提出をお願いする予定ですので、簡易版の要旨でかまいません。

多数の会員の応募を心よりお待ちしております。(国際交流担当理事 酒井啓子)

第 30 回日本中東学会年次大会の開催について

2014 年度の日本中東学会第 30 回年次大会は、東京国際大学が担当校となりました。日程は 2014 年 5 月 10 日（土）と 11 日（日）で、会場は東京国際大学第一キャンパスになります。場所は、埼玉県川越市の場北 1-13-1（東武東上線、池袋から急行で 35 分、霞ヶ関駅下車徒歩約 5 分）です。実行委員会は同校の教員および同校関係者を中心に、日本中東学会の役員も加わり構成されます。実行委員会では、土曜日の公開講演会等を、これから力を入れて企画して参ります。会員の皆様方には、是非多数ご参加いただきたく存じます。こぢんまりしたキャンパスですので、会場内の移動は便利かと存じます。新緑の 5 月に、江戸時代の面影を残す「小江戸川越」で、皆様とお目にかかるのを楽しみにいたしております。（塩尻 和子）

理事会・総会報告

【2013 年度第 1 回理事会】

日時：2013 年 5 月 11 日（土） 10：00—13：00

場所：大阪大学豊中キャンパス 大学会館会議室

出席：栗田禎子、臼杵陽、長沢栄治、三浦徹、酒井啓子、林佳世子、赤堀雅幸、飯塚正人、松本弘、保坂修司、江川ひかり、粕谷元、森本一夫、山口昭彦

欠席：小杉泰

〔議題〕（議題の詳細については、総会報告もご参照ください。）

1. 2012 年度事業報告・2012 年度決算報告を承認した（詳細は総会議事録参照）。
2. 2013 年度事業計画・2013 年度予算案を承認した（詳細は総会議事録参照）。
3. 2014 年 AFMA 大会開催と WOCMES 参加に報告があった（詳細は総会議事録参照）。
4. 『日本中東学会年報（AJAMES）』第 28 号編集報告を受け、第 29 号編集計画を承認した（詳細は総会議事録および『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告参照）。
5. 日本中東学会ニューズレター大会報告号（NL132）を紙媒体で発行することを承認した。
7. 2013 年度公開講演会について承認した（詳細は総会議事録参照）。
8. 会計規程の改定準備について報告があった。
9. 日本中東学会設立 30 周年記念事業を企画することを承認した（詳細は総会議事録参照）。
10. 総会資料を確認した。
11. 会員動向について報告があった。

【日本中東学会第 29 回年次総会報告】

日時：2013 年 5 月 11 日（土）16:30～17:30

会場：大阪大学豊中キャンパス・大学会館講堂

出席：当日出席者 52 名、委任状提出 89 名、計 141 名

(会員数 667 名、定足数 5 分の 1 の 134 名により、総会成立)

1. 司会および総会役員の選出

堀川徹会員の司会により、議長として山岸智子会員、書記として後藤裕加子、熊倉和歌子両会員、議事録署名人として鈴木均、小笠原弘幸両会員を選出した。

2. 2012 年度事業報告および決算

臼杵陽第 14 期会長および第 14 期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 事業報告（報告：臼杵陽第 14 期会長）

- a) 第 28 回年次大会を、2012 年 5 月 12 日～13 日に東洋大学白山キャンパスにおいて開催した。
 - ・ 公開イベント第 1 部「ムスリム NGO の理念と活動」
 - ・ 公開イベント第 2 部「イスラームの怪異」
 - ・ 研究発表 8 部会 57 本、企画セッション 3 本。
 - ・ 韓国中東学会から Hah Byung-Joo 会長、Youn Yong-Su 事務局長を招待した。
 - ・ 開催にあたっては、東洋大学の助成を受けた。
- b) 第 28 回年次大会にあわせ開催した総会での承認により、会則細則□. 1 および□. 2 を改正した。その規定するところにより、会誌 (AJAMES) 編集委員長は役員選挙により選ばれた理事がその任にあたることを会則細則に明記するとともに、会誌担当理事が他の職務と兼務することなく会誌担当の任にあたるようにするため、理事の数を増員した。
- c) 日本中東学会年報 (AJAMES) 第 28-1 号、第 28-2 号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。
 - ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金 (研究成果公開促進費)「学術定期刊行物」の助成を受けた。
 - ・ 海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
 - ・ 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) 上で公開されるよう手配した。
- d) 第 18 回公開講演会「交感する「自由」——近代のイスラーム世界と日本、そして今」を、2012 年 10 月 27 日に、高知県高知市、高知新聞放送会館・高新文化ホールにおいて開催した。
 - ・ 開催にあたり、科学研究費補助金 (研究成果公開促進費)「研究成果公开发表 (B)」の助成を受けた。
- e) 第 4 回日本中東学会奨励賞受賞者を選考した。
- f) ニュースレター和文 3 回 (総頁 92 頁) を発行した。第 128 号 (7/18、年次大会特集、52 頁)、第 129 号 (11/27、13 頁)、第 130 号 (2013/3/5、27 頁)。
- g) 「日本における中東研究文献データベース 1989-2012」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
- h) 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行った。

- i) 地域研究会連絡協議会の幹事組織として、地域研究の興隆を図るとともに、参加組織の相互交流に努めた。
 - j) アジア中東学会連合 (AFMA) の第 9 回大会が 10 月 5-6 日に釜山で開催された。第 21 回韓国中東学会 (KAMES) 国際大会と合同で開催され、今大会の共通テーマは「The Middle East in Change: New Attempts for the Future」であった。日本中東学会からは、会長、事務局長、理事 1 名と会員 15 名が参加した。
 - k) 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行った。
 - l) 第 15 期役員選挙を実施した。
 - m) 大学評価・学位授与機構に、機関別認証評価委員会専門委員候補者として、1 名を推薦した。
 - n) 要請により、日本西アジア考古学会第 20 回西アジア発掘調査報告会を後援した。
 - o) 会員の増減：2012 年度中には入会者 24 名、退会者 37 名（うち逝去による退会 1 名、会費滞納による退会 25 名）の異動があった。その結果、2012 年度末退会予定者も含めた 2013 年 3 月 31 日現在の会員数は 685 名（正会員 515 名／うち海外在住 16 名；学生会員 152 名／うち海外在住 7 名）となった。
- (2) AJAMES 第 28-1 号、第 28-2 号編集報告（林佳世子前編集委員長）
- ・ AJAMES 第 28-1 号、第 28-2 号が刊行された。
 - ・ 28-2 号では、19 本の投稿があり 11 本が採用となった。結果として全ての論文が英語によるものとなった。
 - ・ 2012 年の CiNii でのダウンロード数が 5072 件となった。
 - ・ 科学研究費補助金研究成果公開促進費（学術定期刊行物・欧文誌）を受けた。
- (3) 2012 年度決算報告（報告：三浦徹財務担当理事）
- ・ 業務が効率化されたため、事務局費が当初の予想より低くなった。
 - ・ 会費納入率減少の理由として NL 電子化で未納者への振込用紙の郵送がなくなったことが考えられる。今後は、ML で会費納入を呼びかけ、前納制をとっていることを周知させる必要がある。
- (4) 監査報告（報告：岩崎えり奈監事）
- ・ 学会事務局（慶應義塾大学日吉キャンパス）にて、2012 年度の会計監査を行った結果、適正に執行されたことを確認した。

<質疑応答>

- ・ 特になし

<採決> 以上の 2012 年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。

3. 第 15 期役員選挙報告および理事の任務分掌、監事の選出

松本弘選挙管理委員会委員長および山口昭彦事務局長より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 第 15 期役員選挙報告（松本弘選挙管理委員会委員長）

- ・ 2012 年 11 月 30 日に学会事務局にて評議員選挙の開票作業を行なった。結果は有権者数 413 名、投票者数 158 名（うち有効票 151 票、無効票 7、白票 0）、投票率

は38.3%で、評議員60名を選出した。

- ・新評議員による理事選挙は、2012年12月21日に学会事務局にて開票作業を行った。結果は有権者数60名、投票者数46名（うち有効票45、無効票1、白票0）、投票率は76.7%で、理事15名を選出した。

(2) 理事の任務分掌（山口昭彦事務局長）

- ・以下の通り、理事の任務分掌を読み上げた。

会長：栗田禎子

事務局長：山口昭彦

総務：長沢栄治

国際交流：委員長として臼杵陽、AFMA担当として酒井啓子、WOCMES担当として江川ひかり

AJAMES：編集委員長として保坂修司、副編集長として林佳世子と粕谷元

財務・会則：赤堀雅幸、三浦徹

渉外：小杉泰、代理として飯塚正人

企画：飯塚正人、森本一夫

ニューズレター：松本弘

ホームページ：山口昭彦

(3) 監事の選出（山口昭彦事務局長）

第15期理事会は、監事として、阿部克彦会員、黛秋津会員を推薦する

<質疑応答>

- ・特になし

<採決> 以上の理事の任務分掌と監事の選出について、総会はこれを承認した。

4. 2013年度事業計画および予算

山口昭彦事務局長、および第15期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 2013年度事業計画（山口昭彦事務局長）

- 第29回年次大会を2013年5月11～12日に、大阪大学豊中キャンパスにおいて開催する。
- 日本中東学会年報(AJAMES)第29-1号(2013年7月)、第29-2号(2014年1月)の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。
 - ・刊行にあたり、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「国際情報発信強化」の助成を受ける。
- 第19回公開講演会「参詣と巡礼ー日本と中東イスラーム世界」を、2013年10月27日に、愛媛県松山市において開催する。
- ニューズレターを年数回発行する。年次大会報告号は紙媒体で発行し、会費振込用紙とともに発送することとする。
- 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース1989-2013」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
- 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
- 海外の関連学会との交流を促進する。

- ・ 第29回年次大会に、韓国中東学会から KIM Joong-Kwan 会長、OH Eun-Kyung 事務局長を招待する。
 - ・ 韓国中東学会国際会議（2013年10月11日～13日）に、日本中東学会から会長や事務局長らが参加する。
 - ・ イスラーム地域研究のラホール国際会議（2013年11月2日～4日）に理事等を派遣し、研究ネットワークを構築する。
 - ・ 上記活動に、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「国際情報発信強化」の助成を受ける。
 - ・ 2014年に日本で開催予定の AFMA 大会に向けて準備を進める。
 - ・ 2014年8月18-22日にアンカラ(中東工科大学)で開催の WOCMES への参加準備を進める。
- h) 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- i) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
- j) 東洋文庫との連携事業として「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行う。
- k) 2013-2014年度会員名簿を刊行する。
- l) 30周年企画の立案・準備に着手し、成果を適宜会誌等に反映させていく。
- m) 学会事務局を、慶應義塾大学から聖心女子大学に移転する。
- (2) AJAMES 第29-1号、第29-2号編集計画、2013年度編集体制（保坂修司編集委員長）
- ・ 現在、29-1号の刊行準備を進めている。
 - ・ 29-2号は2013年6月1日に投稿を締め切り、2014年1月に刊行・発送予定である。
 - ・ 2013年度の編集体制として、保坂修司理事が編集委員長、林佳世子理事と粕谷元理事が副編集委員長となり、その他、2名の編集委員の交代があった。
 - ・ AJAMES 投稿用メール・アドレスとして新アドレス (ajames-editor@james1985.org) と旧アドレス (ajames-editor@tufs.ac.jp) が併存しているが、当面は併用した後、最終的には新アドレスに一本化する。
 - ・ 博士論文英文要旨については締め切りを廃し、随時受け付けることとした。
- (3) 2013年度予算案（山口昭彦事務局長）
- ・ 昨年度は会費納入率が下がったため、それに基づいて算定した会費収入でも昨年度に比して減少を見こんでいる。
 - ・ 公開講演会開催のために申請していた科学研究費補助金が不採択となったが、開催自体は既に決定しているため、公開講演会開催費として50万円を計上した。
 - ・ AJAMES 国際化のための科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「国際情報発信強化」を受けることとなったので、支出として「国際発信強化旅費」などの新しい項目を設けた。
 - ・ ニュースレターはすでに電子化しているが、大会報告に関わる号のみ紙媒体で発

行することとしたので、15万円を計上した。

- ・ 昨年度より支出総額が増えているが、科研費収入自体が増えていることを勘案すれば、全体としては、昨年度と大きく変わらない支出規模となった。

<質疑応答>

- ・ 特になし。

<採決> 以上の2013年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

5. 第4回日本中東学会奨励賞について（私市正年審査委員長）

私市正年審査委員長より、貫井万里氏の受賞が報告され、授与式が行われた。

6. その他

特になし。

7. 会長挨拶（栗田禎子会長）

時間の都合により、会長挨拶は省略され、懇親会の場で行うこととなった。

8. 議事終了につき議長の山岸智子会員が降壇し、司会の堀川徹会員により閉会が宣言された。

(山口昭彦)

2012 年度決算

本会計

収 入	12 年度予算	12 年度決算
2011 年度よりの繰越金	10,123,061	10,123,061
年会費	5,567,700	4,475,915
正・学生会員	5,567,700	4,475,915
2009 年度以前分	41,400	25,000
2010 年度分	76,500	85,000
2011 年度分	261,950	250,000
2012 年度分	1,472,050	1,140,000
2013 年度分	3,715,800	2,910,915
2014 年度以降分	0	65,000
賛助会員	0	0
その他	3,250,500	3,231,428
科研費出版助成金	900,000	900,000
科研費公開講演会助	1,000,000	1,000,000
利子	500	342
AJAMES 販売代金	250,000	238,010
AJAMES 掲載料	0	0
海外郵送料実費	0	0
AJAMES 広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担	600,000	600,000
東洋大学学会開催助	300,000	300,000
NII-ELS 著作権料	200,000	193,076
雑費	0	0
収入合計	18,941,261	17,830,404

(単位:円)

2013 年度への繰越金内	10,999,297
郵便振替口座	7,269,192
三井住友銀行口座	3,659,321
Paypal 口座	24,954
現金	45,830

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2011 年度よりの繰越金	623,197	
第 28 回年次大会余剰金	0	
利子	100	
2013 年度への繰越金		623,297
合計	623,297	623,297

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2011 年度よりの繰越金	1,503,981	
奨励金		0
利子	240	
2013 年度への繰越金		1,504,221
合計	1,504,221	1,504,221

(単位:円)

支 出	12 年度予算	12 年度決算
事務局費	2,150,000	1,068,338
アルバイト謝金	1,500,000	830,927
通信費	100,000	48,610
消耗品費	200,000	28,941
会議費	35,000	6,000
交通費	100,000	28,860
振込手数料	20,000	21,105
事務局備品費	100,000	8,295
事務局移転費	0	1,100
資料保管費	95,000	94,500
事業費	5,674,925	5,762,769
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	0
AJAMES 編集費	50,000	96,064
同欧文校間費	300,000	528,090
同印刷製本費	1,709,925	1,928,850
編集委員会交通費	200,000	76,820
ニューズレター等発行	150,000	157,500
NL 等発送費	100,000	8,330
AJAMES 国内発送費	270,000	287,422
AJAMES 海外発送費	145,000	76,880
選挙費用	150,000	164,251
国際交流費	100,000	59,922
インターネット広報費	50,000	38,640
公開講演会開催費	1,000,000	1,000,000
中東文献 DB 更新費	650,000	650,000
地域研究会協議会分	0	0
東洋大学学会開催助成	300,000	300,000
金		
託児所特別基金繰り入	50,000	50,000
諸雑費	50,000	40,000
支出合計	7,824,925	6,831,107
2013 年度への繰越金	11,116,336	10,999,297
総計	18,941,261	17,830,404

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2011 年度よりの繰越金	37,501	
本会計より繰り入れ	50,000	
利用料(2 名)	40,537	
保育料		76,720
振込手数料		0
利子	9	
2013 年度への繰越金		51,327
合計	128,047	128,047

(単位:円)

2013 年度予算 本会計

収入	12 年度予算	13 年度予算
2011 年度よりの繰越金	10,123,061	—
2012 年度よりの繰越金	—	10,999,297
年会費	5,567,700	4,424,200
正・学生会員	5,567,700	4,424,200
2010 年度以前分	117,900	19,200
2011 年度分	261,950	66,250
2012 年度分	1,472,050	152,250
2013 年度分	3,715,800	994,500
2014 年度分	—	3,192,000
賛助会員	0	0
その他	3,250,500	3,750,500
科研費出版助成金	900,000	0
科研費公開講演会助成	1,000,000	0
科研費国際情報発信強	0	2,500,000
利子	500	500
AJAMES 販売代金	250,000	250,000
海外郵送料実費	0	0
AJAMES 広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担	600,000	800,000
東洋大学学会開催助成	300,000	0
NIJ-ELS 著作権料	200,000	200,000
収入合計	18,941,261	19,173,997

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額および納付率

年度	未納額	前年度 (2012 年度)
2009 年度分		11%
2010 年度分	120,000	20%
2011 年度分	265,000	30%
2012 年度分	435,000	46%
2013 年度分	1,950,000	52%
2014 年度分	5,600,000	
合計	8,370,000	

上の表の見方は以下の通り

未納額:本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額
前年度納付率:予算策定年度の前年度(たとえば2013 年度予算であれば2012 年度)決算における会費納付額÷前年度予算に書かれている未納額

*2013 年度予算に書かれている各年度(2010~2014 年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の2012 年度における納付率(=2012 年度決算における会費納付額÷2012 年度予算に書かれている未納額)に5%を足した値を掛けることにより算出している

例)2013 年度分会費収入予算(2013 年度分会費予想収入)
=2013 年度分会費未納額×(2012 年度分会費納付率+5%)
=1,950,000×(46%+5%)=994,500

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2012 年度よりの繰越金	51,327	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	10	
2014 年度への繰越金		101,337
合計	101,337	101,337

(単位:円)

支出	12 年度予算	13 年度予算
事務局費	2,150,000	1,974,930
アルバイト謝金	1,500,000	1,300,000
通信費	100,000	100,000
消耗品費	200,000	200,000
会議費	35,000	35,000
交通費	100,000	100,000
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	100,000	100,000
事務局移転費	0	24,930
資料保管費	95,000	95,000
事業費	5,674,925	6,519,000
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	34,000
AJAMES 編集費	50,000	100,000
同欧文校開費	300,000	750,000
同印刷製本費	1,709,925	2,000,000
編集委員会旅費	200,000	100,000
国際発信強化旅費(海外派遣)	0	150,000
国際発信強化旅費(海外派遣)	0	750,000
AJAMES 宣伝費	0	50,000
ニューズレター等発行費	150,000	150,000
NL 発送費	100,000	60,000
AJAMES 国内発送費	270,000	270,000
AJAMES 海外発送費	145,000	100,000
選挙費用	150,000	0
国際交流費	100,000	100,000
インターネット広報費	50,000	50,000
公開講演会開催費	1,000,000	500,000
30 周年企画準備費	0	100,000
中東・イスラーム文献 DB	650,000	850,000
地域研究会協議会分	0	5,000
東洋大学学会開催助成金	300,000	0
託児所特別基金繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	7,824,925	8,493,930
2013 年度への繰越金	11,116,336	
2014 年度会費分留保		3,192,000
2014 年度への繰越金		7,488,067
総計	18,941,261	19,173,997

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2012 年度よりの繰越金	623,297	
利子	100	
2014 年度への繰越金		623,397
合計	623,397	623,397

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2012 年度よりの繰越金	1,504,221	
奨励金		200,000
利子	300	
2014 年度への繰越金		1,304,521
合計	1,504,521	1,504,521

(単位:円)

第29回年次大会報告

【大会プログラム】

第1日目 2013年5月11日(土)

公開イベント (大阪大学会館)

第1部 シンポジウム 中東研究における言語教育を考える
～学ぶ立場と教える立場～

パネリスト 藤井章吾 (大阪大学)

勝田茂 (大阪大学)

後藤裕加子 (関西学院大学)

司会 高階美行 (大阪大学)

第2部 講談「アリババと四十人の盗賊」

上方講談師・旭堂南海

日本中東学会総会

懇親会 (学生交流棟 カフェ&レストラン「宙」)

第2日目 2013年5月12日(日)

研究発表 (大阪大学 豊中キャンパス)

第1部会

小笠原弘幸 (東洋大学) 「『愛国』なき国民史—オスマン帝国アブデュルハミト二世専制下における歴史教科書の分析」

宇野陽子 (津田塾大学) 「抵抗運動から国民解放戦争へ—第一次世界大戦後オスマン帝国における政治運動の多様性と糾合」

今野毅 (北海学園大学) 「1691年ジズヤ改革にいたる地方の財政事情—16-17世紀アルバニアにおけるジズヤの税額と納税額の分析から」

奥美穂子 (明治大学) 「16世紀オスマン帝国の「王の祝祭」にみる贈与と返礼—贈物供出から恩賞授与、国庫納入の過程まで—」

鷺見朗子 (京都ノートルダム女子大学)・鷺見克典 (名古屋工業大学) 「アラビア語学習者の興味、志向、動機づけ—アラビア語専攻、非アラビア語外国語専攻、非外国語専攻学生の比較—」

竹田敏之 (京都大学) 「イスラーム復興と現代アラビア語の展開—ハムザの表記をめぐる論争とその政治社会的背景—」

アルモーメン・アブダーラ(東海大学) 「アラビア語慣用的表現の分類—意味による分類とその応用の試み」

川本智史 (日本学術振興会) 「イスタンブル旧宮殿の研究」

第2部会

OH Eun-kyung (Dongduk Women's University, Seoul, Korea)

“A Comparative Study on Epic Poems in Turkic Countries and Korea”

秋葉淳 (千葉大学) 「カーディーの町、カーディーの村：18世紀～19世紀初頭オスマン社会における支配者層参入の道」

松尾有里子 (お茶の水女子大学) 「16-17世紀オスマン朝治下のボスニア・ヘルツェゴヴィナ サラエヴォとモスタル法廷の記録を中心に」

杉本悠子 (早稲田大学大学院 J) 「19 世紀シリアにおける地方名士の権力基盤 -アレップ、カワーキビー家を例として-」

錦田愛子 (東京外国語大学)・溝渕正季 (日本学術振興会)・高岡豊 (中東調査会)・濱中新吾 (山形大学) 「レバノン在住パレスチナ人にみられる越境移動と政治意識—2012年世論調査に基づく比較分析—」

鈴木啓之 (東京大学 J) 『パレスチナ革命』の胎動と発展：1970 年代における揺れ動く国家間関係とパレスチナ」

金城美幸 (立命館大学) 「パレスチナ人のナクバとオーラルヒストリー：『ビレッジ・ボックス』を中心に」

清水雅子 (日本学術振興会) 「非民主制下の競合的選挙と権力共有政権——『パレスチナ国民和解合意』に伴う政治過程とその膠着——」

第3部会

吉村貴之 (東京外国語大学) 「第二次世界大戦後のアルメニア『祖国帰還』運動と在外コミュニティ」

近藤信彰 (東京外国語大学) 「サファヴィー朝後期の中央・地方関係——『王達の慣わし』新写本に基づいて」

横内吾郎 (京都大学) 「書物に伝存するウマイヤ朝末期の書簡に関する一考察」

小野仁美 (学習院女子大学) 「古典イスラーム法にみられるジェンダー規範—男性父系血族の役割の分析より」

SEO Jeong-min (Hankuk University of Foreign Studies) “Tribalism and the Arab Political Change”

登利谷正人 (上智大学) 「アフガニスタン・英領インド国境部族地域をめぐる諸政策について：1904 年におけるクツラム周辺における係争の分析を通じて」

佐藤麻理絵 (京都大学 J) 「ヨルダン首都アンマンにおける難民受入と都市の変容」

小阪裕城 (一橋大学 J) 「アメリカ・ユダヤ人委員会の戦後構想と国際人権 1945-1948 ～シオニズムとの関係を中心に～」

第4部会

武石礼司 (東京国際大学) 「中東湾岸 GCC 経済の現状と課題—オイルバブルと発展」

LEE Kwon-Hyung, SON Sung-Hyun (Korea Institute for International Economic Policy) “Trends of Islamic Project Finance in GCC and its Implications to South Korea”

上山一(筑波大学)・臼杵悠(一橋大学J) 「ヨルダンのイスラーム金融利用事情—2010年の顧客調査から—」

YOON, Ki-Kwan(Chungnam National University) “Who and why did Northern Africa classify as the Middle East Region?”

川村藍 (京都大学J)「ドバイ・アプローチの先進性：イスラーム金融における民事紛争処理制度をめぐって」

近藤重人 (慶應義塾大学J)「サウディアラビアの石油政策とパレスチナ問題、1945年—1949年」

横田吉昭 (東京大学 J)「1950年代トルコ共和国の漫画の展開に現れた文化観の転換—国民国家建設期の「国民」文化から大衆文化へ—」

岩坂将充 (日本学術振興会)「トルコにおける司法の変化：1980年クーデタ以降の憲法裁判所を中心に」

第5部会

店田廣文 (早稲田大学)「日本のムスリム・コミュニティと地域社会—福岡市における「外国人住民との共生に関する意識調査」の結果より—」

岡井宏文(早稲田大学)「自由記述データを用いた地域住民におけるイスラーム・ムスリム意識の分析—福岡県福岡市調査の事例より」

石川基樹(早稲田大学)「地域住民におけるイスラーム・ムスリム意識の規定要因—福岡・富山・岐阜調査の事例より」

嶺崎寛子 (愛知教育大学)「グローバル状況下のアイデンティティと交渉：在日アフマディーヤ・ムスリムを事例として」

小島宏 (早稲田大学)「滞日ムスリムにおける第2世代教育に関する意識・行動の関連要因」

小村明子(上智大学)「宗教団体によるボランティア活動の在り方とその課題：日本ヒューマニティ・ファースト及びある日本人改宗者による支援活動について」

KIM Joong-Kwan, YANG Kyung-Su (Dongguk University – Seoul) “A Study on the Social Integration of Immigration from Islamic cultural Area in Korea”

Victor Barrasso (大阪大学 J) “Ornamental and Agricultural Areas In Anduls; Andalusi Munya, the Object of Desire”

第6部会

近藤洋平 (東京大学)「イバード派イスラーム思想における入信、コミットメントの議論」

篠田知暁 (名古屋大学)「競い合うジャズリーヤのシャイフたち—16世紀モロッコにおける枢軸位を巡る言説の分析」

松山洋平 (日本学術振興会)「マートゥリーディー学派研究の射程と今後の課題」

塩崎悠輝 (同志社大学)「ジョホールのマフディー、サイド・アラウィー・アル＝ハッダードとサラフィーをめぐる論争—1930年代の東南アジアにおける法学論争と中東からの影響—」

AHN, Sangjoon (救世軍士官学校) “Islam in the Korea Religions”

福永浩一 (上智大学 J)「ムスリム同胞団形成期におけるハサン・バンナーの活動と思想—回想録と初期原則集を中心に—」

若桑遼 (上智大学J) 「保護領統治下チュニジアにおけるナショナリズムの生成と帰化問題」

小野亮介 (慶應義塾大学 J) 「オーレル・スタイン・ペーパーズから見るゼキ・ヴェリディ・トガン：第1回トルコ歴史学大会批判とウィーン留学を中心に」

第7部会

森田豊子 (大阪大学) 「現代イランにおける家族保護法案をめぐる議論」

KOO, Gi-Yeon (Seoul National University) Making “The Own Public:

Emotion and Self among the Privileged Iranian Youth”

CHANG, Byung Ock (HUFS) “The Development of Iranian Studies in Korea”

JEONG, Young-Kyu KANG, Mu-Hee (Hankuk University of Foreign Studies)

“Iran's Current Economic Situation and Korea's Strategy for Expanding Cooperation with Iran”

Dimitar M. Dimitrov (Hitotsubashi University, J) ”Qatar’s Branding and Positioning in the World of Football”

今井真士 (日本学術振興会) 「エジプト第二共和政と単一政党の優位？——自由公正党の優位政党 (ないしは覇権政党) 化の諸条件——」

勝沼聡 (東京大学) 「近代エジプトにおけるナイルの氾濫と治水対策」

第8部会

辻上奈美江 (東京大学) 「『アラブの春』はジェンダー再編をもたらすか」

YOON, Hee-Jung (Dongguk University) ・ Park, Jung-Ha (Baekseok University)

“Effects of Bicultural Stress on Mother-child Communication of Immigrant Muslim Women”

Jiyeon LEE (Osaka University) “Current Kuwaiti Female Education as Determined by School Text Books”

野中葉 (慶應義塾大学) 「インドネシアにおけるイスラーム短編小説の広がり と女性たちのイスラーム覚醒」

企画セッション

1. Comparative Studies on Iranian Cinema and Its Social Contexts

SUZUKI Hitoshi (Institute of Developing Economies – JETRO) “A Critical Review of the History of Iranian Cinema: Searching for their Own Images”

NUKII Mari (Keio University) “Research Trends of Iranian Cinema Studies in the West”

Keivan Abdoly (The University of Tokyo) “Money and Movie; the state, the production companies and the development of Iran’s film industry”

Moderator : OKA Mari (Kyoto University)

2. Energy, Security, and Reform: Political and Social Challenges in the Gulf after the “Arab Spring”

Steven Wright (Qatar University) “Sustainability in Energy Consumption and Supply in the Arabian Gulf: A Case Study on Saudi Arabian Fiscal and Energy Policies”

Abdullah Baabood (Qatar University) “New security challenges to the Gulf States (GCC)- in the light of the Arab Spring”

HORINUKI Koji (The Institute of Energy Economics, Japan) “An Independency in a State of Dependency: Socio-Economic Challenges in the Northern Emirates”

Moderator : MATSUO Masaki

【公開シンポジウム】

「中東研究における言語教育を考える～学ぶ立場と教える立場～」

このシンポジウムは、中東学会の会員の多い大阪大学外国語学部らしいテーマは何かを求めて、実行委員会の中で意見交換をして決めました。様々な研究分野はあれ、中東研究の第一線で研究を行うには一次資料の利用は不可欠であるとして、大学院生や若手研究者がどのような言語教育を期待し、あるいは、どんな点に苦勞しているかを出し合い、教育する側の立場にある会員と問題意識の共有に貢献できればと考えたのでした。具体的には、

藤井章吾氏 (大阪大学) 「専攻語教育の立場から (アラビア語)」

勝田 茂氏 (大阪大学) 「研究言語教育の立場から (オスマン語)」

後藤裕加子 (関西学院大学) 「歴史学における言語教育について」

の3人から発表をしていただき、高階が司会役でフロアを含めたディスカッションを行いました。

まず藤井氏の発表では専攻語としてのアラビア語教育の歴史を簡単に振り返り、他大学からは分かりにくいかも知れない教育現場で、どんな点に腐心 (チームワークによる教育) し、何を守り (現代書き言葉をオールラウンドに)、何を発展 (口語アラビア語教育) させたいと考えているかの説明がありました。その中では、客観的な評価に耐えられる語学教育としての到達度目標の設定について、資料も配布されました。勝田氏の発表では、週1回の教育でオスマン語を担当する際の困難や苦勞について、事例を挙げて説明がありました。いわば古典語としてアラビア文字を使用するオスマン語教育での学生のモチベーションの問題や、トルコ国内で過去との絆として、市民講座も開催されている例の紹介は、興味深いものでした。最後に、後藤氏の発表は、自らが専攻語として学んだ経験のある氏が、現在は学生に対して歴史研究のために言語教育も行う際の問題点と考察を、まとめたものでした。当日に配布された資料には、発表の大前提として、中東学会会員が所属する大学約130校の2013年度ネット・シラバスにより、何校で教育されているかのデータがありました。一般言語教育科目としては、アラビア語35校、ペルシア語6校、トルコ語7校です。フロアからの指摘で、若干の追加すべき大学もあるようですが、大まかな規模と傾向は掴めるもので、貴重な事実を提供するものでした。アラビア語について言えば、専門科目としてのみ提供する (重複しない) 大学7校を加えると、ほぼ42校となり、これは2005年第21回年次大会で高階が報告したデータ47校 (日本中東学会ニューズレター No.104) とそれほど変わらない数でした。英語以外の語学教育に対する冷たい圧力がかかる事実、履修者数問題、特殊分野の非常勤講師継続手配に関する短絡的な対応 (いわゆる5年

問題) などの難題の中、今後はヨーロッパの副専攻制度や単位互換制度の拡充などの検討が重要であるとの指摘がありました。

主として語学教育の視点からの発表でしたので、最初は議論は低調でしたが、後藤氏のデータへの洩れの指摘や、専攻語教育を行っている大学の遠隔授業としての公開の可能性についての質問、トルコ政府によるトルコ語教育への支援などの情報も出されるなど、議論が盛り上がりかけたところで時間となりました。これらの言語を学ぶ若手の苦労などや要望などを期待していたのですが、若手の参加は2日目に集中し、少し残念でした。しかし、懇親会などの場では、公開中の初級eラーニングコンテンツに加え、中級までを対象とするこうした言語のコンテンツ開発の支援を文科省に要求する際の学会的サポートなどについてご意見を伺うこともでき、総じて言えば、目標とした大阪大学らしい公開シンポジウムとなったのではないかと思います。

(高階美行)

【公開イベント：講談】

第2部として、旭堂南海師匠が講談「アリババと四十人の盗賊」を演じた。年次大会の公開行事としては画期的な催しだが、聞けば師匠は、開催校である大阪大学の出身であり、本大会事務局長の近藤久美子会員のご友人とのこと。その縁で久方ぶりに上方講談に耳を傾ける機会を得られたことに感謝したい。旭堂南陵に代表される上方講談の名流、旭堂一門の話芸は、若い会員のなかには初めて聞いたという者も多かったようだが、純粋に話芸としてこの上なくおもしろく鑑賞できた上に、師匠が底本としたのが『千夜一夜物語』のどの翻訳であるかを考えたり、加えられた多種多様なアレンジ（講談ではアレンジとは言わないのだろうが、用語がわからないのでお許しいただきたい）に感心したり、また中東に今も昔もみられる物語師の伝統と比較考量してみたりと、わずかな時間の間にも実に様々な形で楽しむことができた。ただ、今回のネタはまさに本学会のために練っていただいたものだろうが、おそらく他で演じる機会はあるまいと思うと、はたしてそれでかかった労力に見合うのだろうか心が心配でしょうがなかったのは私だけだろうか。

(赤堀雅幸)

【研究発表会場から】

第1部会

第1発表 小笠原弘幸（東洋大学）『愛国』なき国民史—オスマン帝国アブデュルハミト二世専制下における歴史教科書の分析—

小笠原氏による同発表は、厳しい出版検閲下のハミト期にあつて国民統合がいかにか意図され推進されたかを歴史教科書および関連史料の綿密な分析を通して検証したものである。そこでは、「祖国愛」や「同胞愛」でイメージされる「ワタン」という言葉の欠如を踏まえ、国民間における水平的な統合モデルとは異なり、君主への国民の「忠誠」に基づく垂直的な統合が意図されたものであったと結論づけた。「君主と臣民との関係性」、「カリキュラムにおける歴史教育の比重」などに関して、活発な質疑応答がかわされた。

第2発表 宇野陽子 (津田塾大学) 「抵抗運動から国民解放戦争へ—第一次世界大戦後オスマン帝国における政治運動の多様性と糾合一」

宇野氏による同発表は、トルコ共和国建国の父 M.ケマルが共和国初期に権力を掌握するに至る過程を、それに先立つ国民解放戦争期における諸団体の政治的な糾合と排除の観点から分析したものである。「東部諸州権利擁護協会」、「ウイルソン原則協会」、「緑軍」といった政治運動団体における参加者個人の動向を踏まえた詳細な考察であった。「ウイルソンの民族自決原則との整合性」、「東部会議の連続性」をめぐって、熱心な質疑応答がなされた。(勝田茂)

第3発表 今野毅 (北海学園大学) 「オスマン期アルバニアにおけるジズヤ—1691年オスマン朝ジズヤ改革にいたるまでの税額と納税額の変遷について—」

ジズヤ (非ムスリムの成年男子に課せられる人頭税) に関連する諸台帳の分析によって、16世紀末から約1世紀の期間におけるアルバニアとその周辺地域のジズヤ額や納税世帯数などについて検討した、大変熱のこもった発表であった。発表者が主張したように、特定の地域におけるジズヤ額の変遷を長期的に追った研究は皆無であり、そのような観点からは本発表は興味深かった。ただし、アルバニアの特性、各台帳の性質や関連について、もう少し丁寧な説明がほしかったところである。本発表の結論は暫定的なものであったので、今後の進展を期待したい。

第4発表 奥美穂子 (明治大学) 「16世紀オスマン帝国の「王の祝祭」にみる贈与と返礼—贈物供出から恩賞授与、国庫納入の過程まで—」

オスマン帝国における祝祭のなかでも最大規模で開催された1582年の祝祭における、従来の研究ではあまり着目されてこなかった贈答行為の主に実務面について、「贈物台帳」などの諸台帳の分析に基づいて考察した、手堅い発表であった。質疑では、贈与の儀礼としての側面、贈物・恩賞と職位との関係、贈物の品々などに関する質問がだされた。今後は、同時代のほかの国家における祝祭との比較によって、オスマン帝国の贈与システムの特徴を明らかにしていくことが必要であろう。(吉田達矢)

第5発表 鷺見朗子 (京都ノートルダム女子大学)・鷺見克典 (名古屋工業大学) 「アラビア語学習者の興味、志向、動機づけ—アラビア語専攻、非アラビア語外国語専攻、非外国語専攻学生の比較—」

様々な授業形態でアラビア語を学ぶ大学生に対し、アラビア語学習の目的や授業の満足度などに関するアンケートを行い、統計学的手法を用いて分析した結果の報告である。その結果の一例としてアラビア語を専攻しない学生は専攻する学生と比較するとアラビア語学習への満足感を多く得ており、またアラブ社会・文化への同化の希望が高いということが挙げられた。

第6発表 竹田敏之 (京都大学) 「イスラーム復興と現代アラビア語の展開—ハムザの表記をめぐる論争とその政治社会的背景—」

アラブ世界では近代化に伴い学校でのアラビア語教育が開始され正書法が検討されたが、特にハムザの表記はその複雑さゆえ統一的な表記の規則化が長く回避されてきた。しかし1960年代にカイロのアラビア語アカデミーによってハムザの表記に関する「60年指針」が出され、以降アラブ世界のハムザの表記はこれに従ってきた。その後同アカデミーから「80年指針」が出され、新たなハムザの表記法が提案された(مسؤولではなく مسئول のような表記)が、エジプトのイスラエル単独和平締結が行われたという時代背景から他のアラブ諸国では採用されなかった。

第7発表 アルモーメン・アブドーラ(東海大学)「アラビア語慣用的表現の分類—意味による分類とその応用の試み」

アラビア語には多くの慣用表現が用いられるが、その意味に基づいた分類は未だなされていない。発表者は2つの慣用句辞典に収録されている慣用句およそ6000を意味ごとに分類した。分類にあたっては「人間的項」と「モノ的項」の2種類に大分類した上で、更に詳細な中分類・小分類を設定し、発表では特に人が主体となっている表現、つまり人間社会にまつわる表現を意味に応じた73の項目に分類した。

第8発表 川本智史(日本学術振興会)「イスタンブル旧宮殿の研究」

イスタンブル旧宮殿はトプカプ宮殿とさほど違わない時期に建設されたとされるが文献資料や先行研究が少ない上、図面、遺構も残っていないためその全貌が明らかになっていない。発表者は文献、絵画資料などを用いて旧宮殿が14～16世紀オスマン朝の宮殿郡のなかでどう位置づけられるかを明らかにすることを試み、イスタンブル旧宮殿は儀礼用の中庭を備えていないことからトプカプ宮殿などとは異なった機能を持った宮殿ではないかとの仮説を立てた。(依田純和)

第2部会

第1発表 OH Eunkyung (Dongduk Women's University), "A Comparative Study on Epic Poems in Turkic Countries and Korea"

本発表はテュルク語の話されている国々と朝鮮半島における英雄叙事詩の比較研究であり、具体的には朝鮮の朱蒙(Jumong)の物語とウズベクのAlpamishの英雄叙事詩における矢を射るというモチーフに焦点を当てて考察したものであった。

朝鮮半島においては中央アジアのテュルク語で伝えられる歴史的な英雄叙事詩のようなものはないがシャーマンが伝える叙事詩があり、両者を比較することにより、朝鮮における人々の起源や古代史の諸側面を理解することができるのではないかと展望する。

この二つの叙事詩において、それぞれ尋常でない状況において矢を射る行為は、主人公が生まれ故郷から離れた場所において、英雄であることを証明するものであり、精神的に再生して神との特別な関係を持つことを意味しており、この世に新しい秩序をもたらすことを象徴するものと考えられた。

Alpamishにおけるヒズルとの関連など他のイスラム地域にも関連する事項や北東アジア採集狩猟文化におけるシャーマニズムからの議論など興味深い成果に期待した

い。

第2発表 秋葉淳（千葉大学）「カーディーの町、カーディーの村：18世紀～19世紀初頭オスマン社会における支配者参入の道」

本報告は18世紀から19世紀初頭オスマン社会の支配者層の裾野の拡大についての精緻な発表であった。具体的には当時帝国内に数多くのカーディー家系を擁する町や村が存在していたことに注目して、今回の報告ではとりわけ多くのカーディーおよびナーイブを輩出していたアナトリア南部の町イブラドゥと近隣の村ギョデネについて人口調査台帳を基に世襲的に官位を継承する有力家系について家族、従者、奴隷などの構成員を精査するとともにその教育や経歴について具体的に提示した。

この地域にこのような特異な例がみられる背景として自然環境、産業構造が考えられるとして、教育の尊重と官職を志望することになったと結論づけるとともにその後の情勢によってナーイブ職を得るためにイスタンブルでの修学が一般化していったことなどの推移について展望された。（菊池忠純）

第3発表 松尾有里子（お茶の水女子大学）「16-17世紀オスマン朝下のボスニア・ヘルツェゴビナーサラエヴォとモスタル法廷の記録を中心に」

オスマン朝下のバルカンへのイスラム法廷と司法・行政制度の浸透と定着について、ボスニア・ヘルツェゴビナの都市モスタルにおけるヒジュラ暦1041-43(1632-34)年のイスラム法廷文書を主要史料とした分析結果が示された。史料から判明する法廷の利用者のうち、ムスリムの中には商人と職人に加えて、下級の軍属や役人も含まれていた。他方、利用者の約25%が非ムスリムであった。契約や登記のための利用が多いが、支配者層による大規模なワクフや商業契約は見られない。

考察の結果、小都市のモスタルでは、地域の中心都市サラエヴォとは異なる特徴が見出されるものの、オスマン朝の司法行政制度は地域特有の事情に適合しつつ定着していたことが明らかにされた。

第4発表 杉本悠子（早稲田大学J）「19世紀シリアにおける地方名士の権力基盤—アレppo、カワーキビー家を例として—」

アレppoで17世紀からアーヤーン家系の一つであったカワーキビー家を取り上げ、その動向の分析を通して、19世紀のシリアにおけるアーヤーンの権力基盤について考察がなされた。

アシュラーフの勢力が強かったアレppoでは、その代表であるナキーブ職が特に重要であり、カワーキビー家も17世紀からナキーブを輩出してきた。ところが、19世紀後半に同家のアブド・アッラフマーンがオスマン朝スルタンを批判したために財産を没収され、同家からナキーブ職が奪われると、同家の勢力は傾き一族は困窮した。このことから、政府から任命される職は当時のアーヤーンの権威の基礎の一つであり、それゆえ、その権力には、政権との関係に左右される不安定な面があったと結論づけられた。（谷口淳一）

第5発表 錦田愛子・溝渕正季・高岡豊・濱中信吾「レバノン在住パレスチナ人にみられる越境移動と政治意識」

レバノンに居住するパレスチナ難民とレバノン市民を対象とし、世論調査によって、彼らの越境の傾向と政治意識とのかかわりを調査したものである。家族・親族との紐帯に突き動かされて移動するという、従来の移民イメージを覆す結果が出たことは興味深い。ただし、調査対象の人生的背景を排除した点や、調査委託に際しての問題意識のありかたに対して、疑問を呈する声も複数あがった。

第6発表 鈴木啓之（東京大学J）「『パレスチナ革命』の胎動と発展」

パレスチナ研究協会の資料を詳細に読み解き、1970年代のヨルダン川西岸地区およびガザ地区において展開された政治活動のありかたをあきらかにしたものである。名望家層に影響力を持っていたヨルダンにおもねらず、PLOと接触しつつも一定の距離を保って進められた、当時の若手政治家たちによる活動が、のちのインティファダにも影響を与えたのではないかという、発表者独自の分析も披露され、その意欲的な姿勢や研究の緻密さを評価する声が多数聞かれた。発表者の今後の研究が、おおいに期待される。

第7発表 金城美幸（立命館大学）「パレスチナ人のナクバとオーラルヒストリー」

ビールゼイト大学で80年代後半～90年代初頭にかけて上梓されていた、ナクバにおける破壊村の記録シリーズ「ビレッジ・ブックス」を取り上げ、ライフヒストリーとオーラルヒストリーの相違という文脈から、パレスチナ人のオーラルヒストリーにみられる緊張関係をあきらかにしたものである。ビレッジ・ブックスをこのような側面から論評した研究はおそらく初出であるが、未消化な部分が多いという印象を受けた。今後、発表者が自身の研究にどのように生かすかが問われるであろう。

第8発表 清水雅子（上智大学J）「非民主制化の競合的選挙と権力分有政権」

まさに現在のパレスチナ自治政府にみられる分裂状態を、選挙後の危機への対応における、権力分有政権に伴う政治力学という観点から捉えなおすところみである。非常に情報量の多い発表であり、また「権力分有政権」が、いわゆる挙国一致政権と同義のものであるという認識が共有されていなかったため、やや難解な内容となった。中東政治を中東研究の範疇だけにはとどめず、政治学という文脈で論じるところみは、非常に必要とされている。発表者の意欲的な姿勢は、中東研究者すべてが見習うべきものであろう。

以上が、いずれもパレスチナに関わる第二部会午後の部の概要であるが、4つの発表をとおして司会者が感じたのは、限られた時間内で発表するスキルの重要性である。他の学会よりも比較的長い発表時間を取ることができるため、多くの情報を伝えることはできるが、わかりやすく伝えるという技術を置き去りにしてはならない。発表の研鑽を積むなかで、そのことを常に念頭に置かねばならないと、わが身を省みつつ思う次第である。また、発表内容に不必要と思われる文言を使用する例が、ごく一部ではあるがみられた。研究対象あつての研究発表である。研究対象に敬意を払う姿勢

を忘れてはならないということも、強く主張しておきたい。(菅瀬晶子)

第3部会

第1発表 吉村貴之(東京外国語大学)「第二次大戦後のアルメニア『祖国帰還』運動と在外コミュニティ」

アルメニア人ナショナリティの形成などを中心に多くの研究成果を公表してきた吉村貴之会員は、本発表では公文書やアルメニア・ロシア語文献史料から、特に民主自由党やソヴィエト・アルメニア政府の肝いりで開始される帰還運動のプロセスと、帰還者の内訳等に見られる特徴、政治勢力間の角逐、冷戦の展開と相まったアルメニア人コミュニティへの影響が浮き彫りにされた。時間不足から、基本的事項の確認に関わる質問で終始したことがやや残念であった。

第2発表 近藤信彰(東京外国大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

「サファヴィー朝後期の中央・地方関係——『王達の慣わし』新写本に基づいて」

サファヴィー朝期の中央・地方関係に関わる行政システムの実態は未だ不明な部分が多い。その中で、近藤会員はハイダラバード写本に表れる税収、兵員数、献上品、部族等に関する記述・データから、先行研究に見られる錯簡を正すとともに、対地方関係に見る帝国の「慣習と行政」の実態を究明しようとした。同写本の細かな記述理解との関わりで数件の質問が寄せられた。改めて本報告に見られる一次史料解析の手堅さを再確認するものとなった。(吉村慎太郎)

第3発表 横内吾郎(京都大学)「書物に伝存するウマイヤ朝末期の書簡に関する一考察」

この発表は、同時代史料の乏しいウマイヤ朝史を構築するに当たって、書簡の利用によってその道筋をつけることができることを明らかにしたものであった。研究の対象としてカリフ・ヒシャームの書記サーリムの書簡数点が取り上げられた。これらは、ウマイヤ朝より後代の歴史書、文集、書簡集の中に収録され残されているために、果たして史料として適正か否かを、文体の分析、内容の分析、他の書簡(ワリード2世の書簡と書記アブドゥルハミード・ブン・ヤフヤーの書簡)との比較によって検討が加えられ、サーリムの書簡は信憑性が高く、十分に史料価値を備えていると結論づけた。

第4発表 小野仁美(学習院女子大学)「古典イスラーム法にみられるジェンダー規範—男性父系血族の役割の分析より」

この発表は、イスラーム法におけるジェンダーを男性父系血族の役割に焦点を当てて検討しようとするものであった。スンナ派4法学派の代表的法学書4書に依拠し、10の項目についての規定を抽出した。すなわち、出生・父親の確定・アキーカ・子の扶養義務・未成年者の婚姻後見・未成年者の財産後見・子の監護・相続・葬礼の際の清め・葬礼の礼拝である。学派間に規定の異同があるものの、いずれにしても、男性父系血族の紐帯よりも父親への権限の集中が見られるという見解を提示した。

第5発表 SEO Jeong-min (Hunkuk University of Foreign Studies), “Tribalism and the Arab Politics Change”

SEO氏は、2011年以來続くアラブ政治変動のなかで tribalism が果たしてきた役割に注目し、tribalism が今後のアラブの政治経済システムにいかなる影響を与えるかを解明すべく、まずはこれまでのアラブ世界における部族と国家の関係を分析・類型化した。さらに氏は、アラブ諸国における tribalism の影響力を測るためにモロッコ、エジプト、サウディアラビアの研究者・実業家・学生100人を対象に自ら行ったアラブ19か国の印象調査に基づき、中央集権化の度合いや権威主義体制と tribalism との相関関係を指摘。そのうえで、今日なお tribalism が強力なリビア、イエメン、シリアでは「勝者がすべてを得る」という tribalism の伝統が現在進行中の政治変動にあっても対立激化の要因となっている一方、「民主化」後の国政選挙においても tribalism の影響力は無視できないと主張した。

第6発表 登利谷正人 (上智大学) 「アフガニスタン・英領インド国境部族地域をめぐる諸政策について：1904年におけるクッラム周辺における係争の分析を通じて」

登利谷氏は、第二次アフガン戦争(1878～81年)を経て、インド・アフガニスタン国境が画定された後に発生した国境地帯の諸問題とアフガニスタン・英国関係の実態について、1892年以降英領となったクッラム周辺での両国間の係争と両国合同委員会による調停に焦点を当てて分析。アフガニスタン側の『諸史の灯』とペシャール公文所館所蔵の英国側史料の双方を駆使して、現地住民の抱えていた具体的な問題に両国が共同で対処していたこと、また両国の現地担当官吏の間には密接な連絡があったことを明らかにした。

なお、聴衆はともに15名前後で、両発表の後にはそれぞれ3～4名の聴衆による質問があり、活発な討議が行われた。(飯塚 正人)

第7発表 佐藤麻理絵 (京都大学J) 「ヨルダン首都アンマンにおける難民受入と都市の変容」

難民問題に焦点を当て、都市アンマンの形成と変容過程を分析し、都市の形成と変容に関連する生態的な背景がもたらすものについて検討するものであった。報告では、パレスチナ難民やイラク人難民などの継続的な難民の流入が都市の変容を促す要素として論じられ、難民流入に伴う国際機関やNGOを含む多様なアクターが都市機能を支える実態が紹介された。フロアからは、難民流入に伴う人口増加に関する根拠の妥当性や生態環境に関する分析枠組みと事例との整合性などに関する質問が寄せられた。

第8発表 小阪裕城 (一橋大学J) 「アメリカ・ユダヤ人委員会の戦後構想と「国際人権」1945-1948—シオニズムとの関係を中心に—」

非シオニスト団体であるアメリカ・ユダヤ人委員会(AJC)の戦後構想がどのような経緯で変容したのかを考察するものであった。報告では、AJCが国際人権と各国の

移民法体制の自由化を追求することでユダヤ問題の解決を模索するが、戦後欧州のユダヤ人の **displaced persons** 問題やパレスチナ情勢の激化に加え、米国の移民・難民法体制の改革が遅延したことにより、ACJ が現実的な解決方法としてユダヤ機関との連携やユダヤ国家の樹立へと傾いていく過程が説明され、AJC の活動の中で国際人権が中心的な位置を失っていく経緯が論じられた。質疑応答では、AJC と他の国際機関との協力関係や ACJ の宗派構成などについて質問が寄せられた。(辻田俊哉)

第4部会

第1発表 武石礼司(東京国際大学)「中東湾岸GCC経済の現状と課題—オイルバブルと発展」

GCC加盟6カ国に加えてイラン、イラク、イエメンを加えた9カ国を対象とし、経済指標データの分析を通して、各国の経済動向の比較検討を行う報告であった。報告では、経済環境(化石資源埋蔵量、得意産業部門等)の違いが各国の経済発展の現状を規定していることが解明され、各国が今後採るべき経済発展戦略もそのような経路依存に則ったものになりうるということが論じられた。従来までの湾岸経済研究では、地域の特徴が一様に語られることが多かった。しかし、域内比較研究を掲げた本報告が、湾岸経済およびその経済発展経路の多様性を実証的に解明したことによって、従来とは異なる視角による新しい湾岸経済研究の必要性が強く認識されたと言うことができよう。

第2発表 Kwon Hyung LEE and Sung Hyun SON (Korean Institution for International Economic Policy), “Key Trends of Islamic Project Finance in GCC and its Implication for Korea”

湾岸地域におけるイスラーム金融のスキームを利用したプロジェクト・ファイナンスの実態と今後の可能性を考察した報告であった。報告では、2000年代半ばから湾岸地域において、イスラーム金融のスキームを利用したプロジェクト・ファイナンスの案件が急増傾向にあることが具体的なデータとともに指摘され、対象となる産業部門(不動産、石油関連産業など)が国によって異なることが明らかにされた。韓国においても湾岸地域のイスラーム式プロジェクト・ファイナンスに対する関心が金融業界で高まってきており、より戦略的に参画していくための専門の研究機関の設置が必要であることが論じられた。(長岡慎介)

第3発表 上山一(筑波大学北アフリカ研究センター)・臼杵悠(一橋大学J)「ヨルダンのイスラーム金融利用事情—2010年の顧客調査から—」

ヨルダンにおいてじっさいにおこなった調査を統計学的手法で分析し、イスラーム銀行の利用者層やその理由を解明しようとしたものである。科学的数値の裏打ちから見えてくるイスラーム銀行の「顧客」の姿が明らかにされ、地域差や信仰意識等について今後さらに踏み込んだ解析がなされることをフロアとの議論も合わせて非常に期待させる内容であった。

(第4発表の韓国 Chungnam National University の Yoon Ki-Kwan 氏の“Who and why did Northern Africa classify as the Middle East Region?”と題された発表を予定していたが、Yoon 氏が来日せず中止となった。) (近藤久美子)

第5発表 川村藍会員(京都大学J)「ドバイ・アプローチの先進性：イスラーム金融における民事処理紛争をめぐる」

ドバイで独自に発展しているイスラーム金融の紛争処理制度を検討した。本来、イスラーム金融はイスラーム法の管轄下にあるものの、民事紛争に発展した場合はその管轄から外れてしまうという問題が現実化している。そこで、ドバイでは裁判制度と裁判外紛争処理制度(ADR)を補完する第三の制度が発展し、それはイスラーム金融の分野においても画期的な制度であると評価されると結論付けた。川村報告は、研究と実務を架橋する可能性があるとして評価でき、今後のさらなる事例研究が期待される。

第6発表 近藤重人(慶応義塾大学)「サウディアラビアの石油政策とパレスチナ問題、1945年-1949年」

パレスチナ問題とその対応をめぐる米国とサウディアラビアの対立が石油利権に与えた影響を、同問題の変遷とサウジ国内における議論の再検討から論じた。両国は安全保障・経済分野で関係を深めた一方、パレスチナ問題は石油利権を巡って米サ関係を揺るがす危険性があった。ところが、米国のパレスチナ分割決議案の支持にも関わらず、石油利権が維持された背景には、安全保障・経済的理由が大きいとする従来の議論に加え、サウジ指導部内部での判断の違いや米国側が一線を越えなかったこと、一方で周辺諸国との間で相克があったことなど、アラビア語の新資料に基づく知見が十分に示された。(堀抜功二)

第7発表 横田吉昭(東京大学J)「1950年代トルコ共和国の漫画の展開に現れた文化観の転換—国民国家建設期の「国民」文化から大衆文化へ—」

一党独裁体制下の「民族的」文化政策から脱却し、大衆的、国際的感覚を持つ作品を創出した「50年代世代」の漫画家に焦点をあてることにより、トルコ新体制下における文化観の転換を例証するものであった。Saul Steinberg の影響を受けた Turhan Selçuk と、Cemal Nadir の作風や題材の対比を通して、娯楽的色彩の強まりと「グラフィック・ミザフ」と呼ばれるスタイルへの変化を明らかにした。質疑応答では、①50年代米国に対する風刺、②マイノリティー出身の漫画家の有無、③Amcabeye に対する「民族的」レッテル付与の妥当性について質問があり、活発な議論が交わされた。

第8発表 岩坂将充(日本学術振興会)「トルコにおける司法の変化：1980年クーデタ以降の憲法裁判所を中心に」

憲法裁判所の2000年代に至るまでの制度的変化、成員の選出過程、裁判の内容等の分析を通して、司法の変化の過程及び要因を明らかにしようとの試みであった。EU加盟プロセスにおける法制度改革の中で軍が「後見力」を失ったことと、ギュル大統領

領就任の時間的な流れが重要なファクターであるとの指摘がなされた。レジュメや1982年憲法の改正点等を示した添付資料もわかりやすく工夫されていた。(岡崎英樹)

第5部会

第1発表 店田廣文(早稲田大学)「日本のムスリム・コミュニティと地域社会—福岡市東区における『外国人住民との共生に関する意識調査』より」

第2発表 岡井宏文(早稲田大学)「自由記述データを用いた地域住民におけるイスラーム・ムスリム意識の分析—福岡県福岡市調査の事例より—」

第3発表 石川基樹(早稲田大学)「地域住民におけるイスラーム・ムスリム意識の規定要因—福岡・富山・岐阜調査の事例より—」

これら3本の研究発表は、店田廣文会員を中心とする早稲田大学のチームによる連続発表だったので、まとめて発表と質疑を行うことへの要請があり、出席者からも特段の異論もなく、そのスタイルで司会進行を行った。

こうした研究に全くの素人が司会をしたので、大会の研究発表要旨集を参考に報告する。店田会員の発表は、滞日ムスリム移民という新しい移住者の存在に対して、非ムスリムとしての日本社会がどのように理解し反応しているのかの分析が急務であるとの問題意識から、早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室が行った岐阜市での調査(2009年)と富山県射水市での調査(2011年)を踏まえ、福岡市東区箱崎駅周辺地域で行った調査(2012年)の経緯と方法を説明するものであった。住民基本台帳をベースにした系統抽出法によるサンプリングで、有効回答は326名(有効回収率32.6%)だったとのこと。日本住民とも話しあい、日本人が設計したモスクの近隣住民に対し、イスラム教は、「先進的な教えである」、「寛容な宗教である」、「過激な宗教である」等の設問への回答を性別、年齢、校区別の集計をしたところ、意味のある差が存在するので、複合的な分析が必要であると、導入発表としてまとめた。

次の岡井会員の発表では、上記の福岡市での調査の自由記述データを、テキスト・マイニング方式で分析し、カテゴリ化された構成要素に対して、様々な統計的分析により、地域住民の対イスラーム・ムスリム意識の特徴を把握しようとするものであった。統計的手法の詳細は司会者の理解を超えたものであったが、構成要素のクラスター分析の結果は、否定的なマイナスイメージも混じる中、信仰への真摯な態度や地域的な関わりに由来する評価面もあるなどは、意外な事実であった。

最後の石川会員による発表は、上記の3地点での調査を基に、対イスラーム観が相互にどう異なるかを統計的に考察するものであった。構造方程式モデルを用いた多母集団同時分析とかは、司会者の理解能力を超えたものではあるが、分析結果に話が及ぶと、非常に興味深い内容があった。例えば、3地域によって年齢、性別、学歴などの要因ごとに異なる傾向がありはするが、接触仮説(接触や交流が寛容性を増加させる)が3地域共通で検証された点などである。

3報告をまとめた質疑では、回収率の低さの問題、データがどの程度何を代表しているのか、専門的な分析方法論に関する内容などに質問が及んだが、発表者チームの調査の出発点となる問題意識についての疑義はなく、日本社会におけるイスラーム受容プロセスの研究がここまで進んでいるのかと、素人ながら強い感銘を受けた。同時

に、データ処理の手法に関する統計学的知見は、確かに先駆的で難解ではある。しかし、個人情報限界はあるが、このような研究を指針として、受容ないし反発する個人の、もっと具体的で詳しい事例調査ができないものかとの印象を持ったことを記しておきたい。(高階美行)

第4発表 嶺崎寛子(愛知教育大学)「グローバル状況下のアイデンティティと交渉：在日アフマディーヤ・ムスリムを事例として」

嶺崎寛子氏は在日アフマディーヤ・ムスリム(約200名と少数だが、背後に数千万とも言われる信徒たちの、よく組織化されたグローバルなネットワークを持つ)を対象としたフィールド調査を約一年間にわたり行ってきた。発表では、この調査で得られた知見等に基づき、アフマディーヤ信徒の複層的で動的なアイデンティティのあり方、ホスト国・社会との関係、積極的な多言語使用を含む生存戦略等を分析、発祥地で迫害され世界中の離散地で繁栄するにいたった同コミュニティが「同化ではない共生」をいかに実現しつつあるかが示された。事例紹介から理論的な考察へと、よく準備された発表であり、質疑応答(ディアスポラという述語使用の妥当性をめぐる議論など)も活発になされた。

第5発表 小島宏(早稲田大学)

「滞日ムスリムにおける第2世代教育に関する意識・行動の関連要因」

小島宏氏の「滞日ムスリムにおける第2世代教育に関する意識・行動の関連要因」は、多変量解析を適用した統計学的研究だった。使用データは早稲田大学・店田研究室が行った調査(2007-2008年)で得られたもの。こどもを持つムスリム家庭の学校教育に関する悩みや不安、日本での教育計画や家庭でのイスラーム教育にまつわる様々な意識等が、他のどのような要因(年齢、性別、収入、言語、民族等々)と正負の関連を持つ(と解釈される)かが示された。報告後は、ムスリム移民に対する公的政策の有無について韓国人研究者から質問があり、関連してクリスチャンが多い韓国と少ない日本という社会的背景の比較論議もなされた。

第6発表 小村明子(上智大学)「宗教団体によるボランティア活動の在り方とその課題—日本ヒューマニティー・ファースト及びある日本人改宗者による支援活動について—」

小村明子氏は、在日アフマディーヤのNGO団体と日本人改宗ムスリム(臨床宗教師)による東日本大震災被災者への別個の支援活動を紹介。宗教色のない活動を通して逆に日本人のイスラーム・イメージを向上させる一方で、他のムスリムからは異端視されるアフマディーヤの現状にも言及した。国内でムスリムから支援を受けた日本人の反応などは無知な司会者には新鮮で興味深く思われたが、聴衆からは、先行研究(アフマディーヤNGOの支援活動に関する前述嶺崎氏による論文等)の無視や調査方法の説明がないなど学問的手続に関する不備、事例紹介以上の分析の欠如、など厳しい意見も出た。司会者の力量不足や時間制限で議論を尽くせない点もあったが、発表者には今後、批判点をクリアした上での成果発表を是非期待したい。(福田義昭)

第7発表 Kim Joong-Kwan, Yang Kyung-Su (Dongguk University), “Egyptian Migration Policy in Term of Social Adaption”

韓国・東國大學校の Kim Joong-Kwan 氏と Yang Kyung-Su 氏による共同研究。発表担当は Yan 氏。司会者の不手際から14:30開始の発表が10分ほど遅れた点と、事前の確認不足で発表タイトルの変更気づかなかった点、参加者の方々にご迷惑をおかけした。“A Study on the Social Integration from Islamic Cultural Area in Korea” がプログラム記載のタイトル、変更後のタイトルが標記のもの。同発表は近年、ヨーロッパ、特にイタリア・フランス2国へエジプトから移民が増加している現象をとらえ、I「序論」、II「現代エジプトの移民の概観」、III「現代エジプトの移民の特徴」、IV「エジプト政府の移民政策」、V「結論」の順に手堅く論じている。配布資料を省略するのが最近の学会発表の一般的傾向だが、この Kim 氏・Yang 氏の共同研究発表では用意されたハンドアウトが参加者の理解を大いに助けた。

第8発表 Victor Barraso (大阪大学 J) “Ornamental and Agricultural Areas in al-Andalus: Andalusī Munya, the “Object of Desire”

発表は、発表者が大阪大学大学院言文化研究科に提出した博士論文の抜粋。アラビア語の *munya* はもともと「願望 *desire*」を意味する名詞だったが、アンダルシアに入り (1) 農業的 (つまり実用的) 構造物、(2) 趣味的 (あるいは観賞用) 構造物を指す語に意味的に変容して「庭園」に近づき、やがて盲目的に *garden* としてヨーロッパ語に翻訳されるに至って誤訳と混乱のもとになった。Barraso 氏は8世紀から15世紀にかけてのアンダルシアの農業関連文献から丹念に用例を拾い、*munya* の変容過程を詳論する。アンダルシアの農業関連文献多数が *munya* に言及していることはすでに研究者から指摘されてきたが、12~13世紀の北アフリカ (*Ifriqiyyā*) の文献が *munya* に言及している事実を指摘したのは Barraso 氏が初めて。(藤井章吾)

第6部会

第1発表 近藤洋平 (東京大学) 「イバード派イスラーム思想における入信、コミットメントの議論」

イバード派への入信に関する議論のなかでも、加入者の資格やコミットメントについての議論を、資料をもとに検討し分析をするという発表である。ハワーリジュ派のなかでも穏健派のイバード派は少数派ながらも現在もオマーン、リビアの南部、アルジェリアの一部に現存しており、その研究には重要性が高い。同派には豊富な資料が残されており、本発表ではこれらの資料を駆使して、初期のイバード派への入信の諸相を取り上げ、入信の諸条件と改宗活動における宣教者の役割、信仰共同体への参加と相互扶助などの点が検討された。イバード派については、これまでほとんど研究されてこなかった分野であり、今後の発展が期待される。

第2発表 篠田知暁(名古屋大学非常勤講師)「競い合うジャズーリーヤのシャイフたち——16世紀モロッコにおける枢軸位をめぐる言説の分析」

本発表は、15世紀から16世紀にかけてモロッコで活動したスーフィー教団、ジャズーリーヤの指導者たちの地位を巡る争いのなかで、「枢軸位」とされる創始者の後継位をめぐる抗争と、その基盤となった指導者論について研究したものである。教団は教祖ジャズーリーの死後、2派に分裂したが、それを契機に「後継者」の資格を巡る論争が起こる。3代目の後継者とされるガズワーニーの死後は、カリスマ的な指導者が不在となり、共同体的な組織として、ザーウィヤを世襲するシャイフたちを中心にした諸集団となり、モロッコ各地に展開した。興味深いことに、近年、モロッコのナショナリズムとの関連性から新たな議論が生じていることも紹介された。

第3発表 松山洋平(日本学術振興会)「マートゥリーディー学派研究の射程と今後の課題」

アシュアリー学派とならぶスンナ派の2大神学派として認識されているマートゥリーディー学派の研究が、近年、急速に進み、その固有の思想の重要性が指摘されるようになった。本発表では、スンナ派内部の理性主義的な思想潮流を検討しながら、神学派ムタズィラ学派や法学派のハナフィー派との関係や、同学派の思想を現代の諸問題に応用するための新たな側面への検討の示唆、各時代・地域における同学派の影響や導入などに関する研究の重要性などが検討された。とくに同学派の今日的な存在意義については、ハナフィー法学派との密接な関係において、サラフィー主義者と近代化を模索する人々との双方に影響を与えている点が指摘されて、注目される発表となった。(塩尻和子)

第4発表 塩崎悠輝(同志社大学)「ジョホール・ムフティー、サイド・アラウィー・アル＝ハッダードとサラフィーをめぐる論争：1930年代の東南アジアにおける法学論争と中東からの影響」

塩崎発表では、現在のマレーシアで行政機関による宗教管理の制度的な支えとなっている「ファトワ管理制度」の由来を考える際に、1930年代にアラウィー・アル＝ハッダードとアフマド・ハサンとの間で展開した論争が重要な意味を持つてくることが指摘され、その論争の経過や背景が論じられた。結論として、「サラフィーの台頭に対して、伝統的なシャーフィイー派法学を擁護する主要な勢力の一つとして、アラウィーヤのウラマーがいた。

マレーシアのファトワ管理制度は、スルタンの権威によるシャーフィイー派法学の擁護を求めるこのようなウラマーの積極的な要請によって強化されていった側面が大きい」ことが指摘された。(森本一夫)

第5発表 AHN Sangjoon(救世軍士官学校)“Islam in the Korea Religions”

儒教、仏教、キリスト教など他宗教も含む韓国の宗教事情の分析をふまえて、同国におけるイスラームおよびムスリム・コミュニティーの現状を論じる報告であった。少数ながらも活発化の傾向にある韓国のイスラーム諸団体の活動実態や、その将来的展

望について詳細な考察がなされた。我々が普段あまり知ることのない隣国のイスラームについて、大いに関心を抱かせる興味深い報告であった。

第6発表 福永浩一（上智大学）「ムスリム同胞団形成期におけるハサン・バンナーの活動と思想—回想録と初期原則集を中心に」

同胞団創設者バンナーの思想分析をつうじて、彼が同胞団結成に至る経過を考察する報告であった。福永氏が使用した一次資料は、バンナーの著作の中ではこれまで十分に分析されてこなかったもので、バンナー思想研究に新たな一石を投じるものといえよう。また、研究史上の空白といえる同胞団結成以前のバンナーの思想や活動を解明する試みは、今後のさらなる発展が期待できるものであった。（横田貴之）

第7発表 若桑遼（上智大学J）「保護領統治下チュニジアにおけるナショナリズムの生成と帰化問題」

本発表は、チュニジア人の仏国への帰化問題が従来一国内の文脈で論じられてきたことに對し、エジプトやアルジェリアなど他のアラブ諸国でのファトワーも研究対象とすることで、ナショナリズムの生成過程に新たな検討を加えたものである。そこから特に国籍と宗教の不可分性という当時のナショナリストと宗教学者にほぼ共有されていた見解を析出している。

第8発表 小野亮介（慶應義塾大学J）「オーレスル・スタイン・ペーパーズから見るゼキ・ヴェリディ・トガン：第1回トルコ歴史学大会批判とウィーン留学を中心に」

本報告は、著名な東洋学者トガンの回想録で扱われている時代以降の彼の生涯と思想について、英国人東洋学者 A.ステインとトガンの往復書簡を史料として読み解き、トルコ出国とウィーン留学の理由などを中心に再検討をしたものである。両者いずれの発表も先行研究で看過されてきた部分を照射し、その間隙を埋める新たな史料の発掘とその詳細な検討を踏まえての報告であった。

発表後には前者についてはチュニジアの問題が他アラブ諸国へ伝わった当時のメディアの問題について、また後者については更なる新しい史料発掘の可能性などについて幾つかの質疑応答があり、若い研究者の意気込みとまた今後の研究の進展が楽しみに思われたセッションであった。（鷹木恵子）

第7部会

第1発表 森田豊子（大阪大学）「現代イラン家族保護法をめぐる議論」

女性の権利の拡大を目的として革命前の1967年にイランで制定されたものの、ホームイニー師がイスラームに反していると発言したことから革命後には適用が停止され、それにもかかわらず革命から30年近く経つ2007年に再び国会に提出された法律「家族保護法」をとりあげ、イランにおける「家族」をめぐる議論を検討するものであった。発表は、イラン社会における変化、すなわち、女性の高学歴化、平均結婚年齢の上昇、離婚の増加などと同法律が国会に再提出されたこととの関連について考察した。なお、時間制限のため、同法律と女性運動との関わりについては触れられなかった。次回の発表を期待したい。

第2発表 Koo Gi Yeon (Seoul National University), “Young Iranians in Mask: Emotion and self in Iran”

2009年2月より2010年1月までテヘラン北部の裕福な若者に密着した人類学的調査に基づいている。革命後に生まれ、「第三世代」と呼ばれる若者は、公的と私的な自己を分ける二面性 (do ru) という文化的実践を日常的に行ない、自分の本当の感情を露見させないために仮面を被っているとした。フロアからの「二面性は若者に限らないのでは」という質問には、親にも自分の感情を打ち明けない若者の存在や、冷めていると思われていた若者世代による熱狂的な選挙運動活動を挙げ、もはや二面性ではなく若者の多面性に注目する必要性を示唆した。(中山紀子)

第3発表 CHANG Byung Ock (Hankuk University of Foreign Studies), “Iran and Korea: The Development of Iranian Studies in Korea”

発表者は、中世アラビア語史書にみえる韓斯関係の歴史を概観した後、韓国における中東研究史を解説した。大学における中東研究部門が、中東戦争を契機として国家主導で設立されたことに、日本とはかなり異なる研究事情を感じた。ペルシア語の教育・研究は、現在、1976年設立の韓国外国語大学校のみが行っており、今後は、政府レベルでのより戦略的なサポート体制による裾野の広がりが期待されるということであった。学生のペルシア語学習への動機付けの必要や、就職難による若手研究者育成の行き詰まりなど、日本とも共通の問題を抱えているが、イラン研究の発展のためには教育界と実業界が手を携えるシステムの構築が必要であるという結論には、再び我が相違を考えさせられた。

第4発表 JEONG Young-Kyu & KANG Mu-Hee (Hankuk University of Foreign Studies) “Iran’s Current Economic Situation and Korea’s Strategy for Expanding Cooperation with Iran”

演題に興味を惹かれて20人近く聴衆が集まったが、発表者が発表時間直前まで現れず、原稿の準備も不備であった上、発表自体も原稿のランダムな読み上げに終わったため、正直期待外れの感を否めなかった。内容は、イランが原油を、韓国がITを含む工業製品や技術を、互いに輸出し合うという相補的な関係にある両国が、経済的に重要なパートナーである事、今後は韓国が油田開発にも進出し、資本、技術、経験をセットしてイランの製造業やエネルギー産業の発展に寄与し、経済関係を強化していくべきである、という一般的なものであった。聴衆からは、経済制裁の影響と、それに韓国がどう対処すべきかについて論じてほしかった、という意見が出された。

(藤元優子)

第5発表 Dimitar M. Dimitrov (一橋大学J) “For the World, For the Game: Qatar’s Branding and Positioning in the World of Football”

発表の目的は、サッカーと外交との関係やメジャーな大会のホスト国となることの意味を検証することであり、その事例として、2022年のワールドカップ開催国となったカタールが取り上げられている。カタールや周辺アラブ諸国がサッカーの国際大会のホ

スト国となった過程を示しながら、カタル政府がサッカーにかかわる国際社会のなかで、いかに自国の良好なイメージを創出させていったかが描かれた。

第6発表 今井真士（日本学術振興会特別研究員）「エジプト第二共和政と単一政党の優位？：自由公正党の優位政党（ないしは覇権政党）化の諸条件」

発表の目的は、エジプト1月25日革命後に結成され、議会選挙、大統領選挙で勝利した自由公正党（ムスリム同胞団）が、今後も政権党であり続けるのかという問題への考察である。今井氏は社会的側面、政治的側面、経済的側面の3点から、自由公正党が優位政党もしくは覇権政党となる「優位の好循環」が生じるか否かにつき、それぞれの側面で有利な状況と不利な状況を指摘した。

いずれの報告も、最近話題となった事象をテーマとしつつ、国際的な舞台でのその特質や深層に迫ろうとする野心的なものであり、活発な質疑応答を惹起した。（松本弘）

第7発表 勝沼聡（東京大学）「近代エジプトにおけるナイルの氾濫と治水対策」

「ナイルをめぐる社会史」ともいうべき分野ではこれまでも興味深い研究が蓄積されてきたが、その多くは（食糧生産における重要性という観点から）ナイルが一定の水位に達することへの人々の関心（およびそれに関連する儀礼や民衆運動）を扱うものだった。これに対し、本報告は「治水」の側面に焦点を合わせ、特に近代の、英占領期に関して、治水をめぐる行政・法制度、氾濫の具体的事例（1887年と1892年）とそれに対する対応の実態を明らかにしようとした。報告を通じ、治水対策の具体的あり方、治水にあたっての地域別「優先順位」、灌漑区と行政区分との関係、政府による対応と住民による対応の差、などの重要な論点が浮き彫りとなり、治水と国家権力、地域社会の関係をめぐって活発な議論が行なわれた。（栗田禎子）

第8部会

第1発表 辻上奈美江（東京大学）「『アラブの春』はジェンダー再編をもたらすか」

2011年以降にアラブ諸国で起きた民衆運動の高まりと政治体制の動揺は、いまだその帰結するところを判断しがたいが、発表者は民衆運動に果たした女性の役割の大きさを認めつつ、今後女性の政治的経済的地位やジェンダー観がどのように変わっていくのかを、エジプト、チュニジア、バハレーン、サウディアラビアの比較から考察した。系統的な比較の視点に立った意欲的な研究の試みであるが、文献と聞き取りによる調査が端緒に就いた段階であり、その意図は十分に伝わったものの、何をもって「ジェンダー再編」と呼ぶのかを含め、研究としての評価は今後の展開を待つ必要がある内容であった。

第2発表 YOON Hee-Jung, PAR Jung-H (Dongguk University), “Effects of Bicultural Stress on Mother-child Communication of Immigrant Muslim Women”

ソウル周辺域に居住し、韓国男性と婚姻し子供をなしたムスリム女性96名を対象に、外国人としての被差別、出身国との文化的な差異、母子間のコミュニケーションについて、被調査者の意識のなかでの相関関係を、統計的に調査した研究である。容

易に予測されると思われることがらでも、統計的にこれを裏付けることの意義は大きいと実感された一方、変数の設定などには若干の疑問が感じられた。なお、発表題は英語であったが、発表質疑応答ともに流暢な日本語で行われた。(赤堀雅幸)

第3発表 Jiyeon Lee (李知妍) (大阪大学) “Current Kuwait Female Education as Determined by School Text Books”

最初に教科書分析の意義とクウェート女性の現状を概観され、さらに教科書は学生の社会化の過程において、その適応に重要な役割を果たすが、クウェートでは教科書が女性の社会進出の阻害要因の一つになっているのではないか、という問題意識と研究の視座を表明された。

次いで、教育省発行の小学校1年～6年用の国語、英語、社会、家庭科の内容分析結果を発表され、その結果、伝統的な女性像が踏襲されていることが明らかにされた。

この発表に対し、高等教育における女性比率、検定における教育省の役割、さらに、家庭内での躰や教育はメイドによって行われる傾向があるが、その姿は教科書に反映されているか、等の活発な質問が出された。

第4発表 野中葉 (慶應義塾大学) 「インドネシアにおけるイスラーム短編小説の広がり」と女性たちのイスラーム覚醒

インドネシアで女子高生や女子大生を読者対象とし、イスラーム的テーマを扱った短編小説が、1990年代初頭に叢生し2000年代半ばに終焉を迎えたが、発表ではこれら短編小説の歴史、内容を分析し、この特異な小説群の誕生、隆盛、終焉の推移を、社会、政治、宗教、等の変化の中に位置づけられた。

そして当該作品群は若い女性主人公の実体験を一人称で描き、ムスリマの葛藤や理想を提示したが、イスラーム化の進展とともに、男性作家による専門的な長編小説にその席を譲ったと結論付けられた。

斬新なテーマであり、かつ綿密な分析が行われた優れた研究であるが、「イスラーム短編小説」という用語に違和感があり、一考を要するのではないかと。(岡崎桂二)

企画セッション

1. “Comparative Studies on Iranian Cinema and Its Social Contexts”

企画セッション1では、1979年のイラン革命によって大きな危機に直面し、その後1990年代に国際的な評価を得たイラン映画が、国内の厳しい政治状況にもかかわらず新たな表現領域を開拓しつつある現状について3人のパネリストが歴史的・社会経済的に検討した。

初めにセッション・オーガナイザーである鈴木均氏(アジア経済研究所)が企画趣旨を説明、続いて貫井万里氏(日本国際問題研究所)が、国際的評価の高まりに伴い90年代末以降、欧米で増加したイラン映画研究の動向について紹介した。グローバル化により“National Cinema”や「イラン映画」という概念自体が揺らぎ、地理的領域にとらわれずに国外在住のイラン系映画監督の作品を含めた枠組みを再設定する必要性が論じられていること、次いで、タイプ別、アプローチ別のイラン映画研究の分類が

なされる中で、新たな視点として、ディアスポラという観点から照射された「文化的アイデンティティ」と「イラン・イラク戦争 the Sacred Defense War」映画の分析が登場していることが報告された。

次にケイワン・アブドリ氏（東京大学）が製作サイドに焦点を当て、1930年代から78年の革命まで映画製作に参入した企業数の推移の統計を元に、作品製作数の多い企業の歴史とその経営者たちの社会的出自（学歴、経営者としての経験、映画関連事業の職歴経験、そして宗教的・民族的出自）を分析し、その社会的バックグラウンドの特徴を検討した。さらに、革命後は国家機関が映画製作に主導的な役割を果たしてきたことを説明し、映画産業に参入する起業家が減少したのは起業精神の衰えというよりも、映画産業における国家の圧倒的な支配という構造に求めるべきだと主張した。

最後の鈴木均氏の報告では、議論の前提としてイランの文脈において映画という「近代的な」総合芸術がどのような伝統的表現に依拠しようとしてきたかを確認した。革命以前のイランでは大衆的な娯楽映画がイランの観衆を魅了し、国内で製作される映画もそれらが大多数であったが、1969年の「牛」や「ゲイサル」に代表される芸術的作品が革命前にも製作されていたことは、革命後のイラン映画の隆盛につながったと指摘し、こうした歴史的経緯をイラン人自身がどのように自己認識するに至ったか、イラン国内で刊行された主要なペルシャ語文献を用いて検証した。

フロアーとの質疑応答では、短い時間ではあったが、他の中東諸国におけるイラン映画への関心、「イラン映画」の枠組みの議論とその背景、大衆映画への評価、インド映画との関係、映画の受容過程（観客）の分析方法など多彩な質問がなされ、有意義な議論が展開された。（岡真理）

2. Energy, Security, and Reform: Political and Social Challenges in the Gulf after the “Arab Spring”

企画セッション2は「エネルギー・安全保障・改革：『アラブの春』後の湾岸諸国における政治的・社会的課題」と題して、3本の報告が行われた。

はじめに、スティーブン・ライト会員（カタール大学）から「アラビア湾岸におけるエネルギー消費・供給の持続可能性——サウディアラビアの財政およびエネルギー政策を事例に」と題する報告が行われた。サウディアラビアでは、「アラブの春」の影響を受けて財政支出が増加した。一方で、国内のエネルギー需要が増加しているが、これはエネルギー輸出能力を低下させることになり、石油収入に依存する同国にとって持続性の観点から問題がある。特に政治システムの根幹をなす補助金政策に課題があり、同国の持続性を考えた際、さらなる改革が必要であると結論付けられた。

続いて、アブドゥッラー・バーアブード会員（カタール大学）から「湾岸諸国における新しい安全保障上の問題——アラブの春の視点から」と題する報告が行われた。湾岸諸国の安全保障問題は伝統的に、小さな湾岸小国と大きな隣国との関係を論じる「ハード・セキュリティ」と、国内の問題、すなわち「ソフト・セキュリティ」を論じる二つの側面から捉えられてきた。ところが、この内部と外部、ソフトとハードという二分法的な議論は、脅威の変化や「アラブの春」によってもたらされた新たな問題など、より一層複雑化する湾岸の安全保障環境を的確に捉えることができないと指摘。

GCC 諸国の地政学上の変遷を踏まえ、地域問題の解決のために集合的なアプローチと新しい安全保障構造が必要であると主張した。

最後に、堀抜功二会員（日本エネルギー経済研究所）から「従属のなかの独立性：UAE 北部首長国における社会経済的課題と政治」と題する報告が行われた。UAE の北部にある5つの首長国は、資源や経済面で豊かな南部のアブダビおよびドバイと比べて、大きな経済・発展の格差が存在する。そのため、北部首長国は従来から南部や連邦政府に経済・財政上依存する構造があり、このような「南北問題」とも呼べる格差が、「アラブの春」を前後して UAE の政治リスクとして注目されるようになった。報告では、いかに「南北問題」が連邦制度や政治に影響するかという問いの下、UAE における政治改革運動の動機となっている点が指摘され、また UAE 政治の分析において連邦制度という枠組みを議論する重要性が強調された。

以上の報告に対して、討論者の松尾昌樹会員との間で質疑応答が行われた。本企画セッションには、カタル大学から2名の会員が来日したこともあり、学会後半の時間帯にも関わらず30人以上の参加者があった。フロアとの間でも、非常に闊達な議論が行われた。今後の日本における湾岸研究の進展が大いに期待される。（堀抜功二）

【大会を終えて】

第29回年次大会（2013）を終えて、まず湧き起った感慨は感謝の念でした。「終わりよければすべてよし」とはいうものの、まず第1に感謝したのは、全国各地から参加して下さった220名以上もの多くの方々に対してでした。旧大阪外国語大学としてはともかく、大阪大学となった今、正直申して、中東研究の分野で眺めてみれば、研究者の数も実績もそれほどの存在ではありませんでした。大阪という地の利があるとはいえ、そうした大学にどれほどの会員の方々のご参加があるかと、不安だったことを告白します。第2に感謝するのは、栗田会長をはじめとする執行部に対してです。主要な問題への明確なお考えを適切にお示しいただき、最後の追い込みの1月前くらいからは、大会実行委員会の責任の取り方に悩む必要がなくなりました。これがどれだけの精神安定剤となるかは、当事者でないとお分かりいただけないかもしれませんが。

私の感謝の3番目は、大会準備の全般を担当してもらった近藤久美子氏や同僚の教員、とりわけ辻田俊哉会員に対してです。近藤会員の全般的注意は見事なものでしたが、2日間の会場セッティングや懇親会（メニューや飲み物と食べ物の割合と量）などについては、豊中キャンパスに研究室のある辻田会員の知識と経験なしには、かなわなかったでしょう。これに彩どりを加えたのが、サポートメンバーであった学生のアルバイト先「箕面ビール」のご好意による、格安価格での著名地ビールの提供と、大学のベリーダンスチームによる演技でした。幸いにも、初日参加者の大半の方が懇親会も最後までいてくださり、いろいろな情報の交換や旧交を温める場として活用いただいたことは、大変嬉しいことでした。

もし本音を述べてお許しいただけるなら、4番目の感謝は大会2日目が好天となったことに対してです。初日は前夜来の雨が上がるかと思いきや、小雨が降り続き、参加者の出足も鈍いままでした。廊下やホールに配置できない規則でしたので、書店ブ

ースを訪れる人の足も極めて少なく、泣き顔同然に2日目の場所の変更を打診された時は、お断りするよりほかになく、つらいものでした。ところが、翌日は天気がガラッと変わり、好天のもと、すがすがしい空気の中で研究発表が進みました。建物は離れているのに、広報に努めた結果、書店ブースを訪れる方も増え、2日間を通していても平年並み以上の売れ行きだったと伺いました。書店ブース来訪者の事を記しているのは、今年度の学会参加者数について、平年と比べての指標になりますし、また、遠方よりお越しいただく会員の方々にお役に立てたことにもなるからです。

2日目の研究発表が始まった時、私はもう1つの点で安堵の胸を撫で下ろしました。それは、他の同僚会員には心配をかけたくなかったので、素振りはありませんでしたが、会場近くの建物が工事中のシートで囲まれていたのに気づかれた方も多かったと思います。実は、安倍ノミックスの余波で大学の改修工事が急遽決まり、3月に入ると、2日目の研究発表会場近くの建物で工事が土日の区別なく行われるとの情報が入ったのでした。“万事休す”の思いでした。しかも、工事予定表を見ると、年次大会開催のあたりは「特に騒音が激しい期間」となっていました。その時点での会場変更はもう無理ですから、必死で関係部局に5月12日(日)の工事だけは休んで欲しいと頼みまわりました。同じ大学でもよそのキャンパスのよその部局の工事ですので、ひたすらご好意にすぎるとはなかつたのです。ご協力の約束はいただきましたが、直接の工事担当者まで実際に伝わっているかまでは確認できませんでした。そんなわけで、9時になっても10時になっても工事再開の気配がなく、深く安堵しました。これを記したのは、自分のキャンパスで日頃使っている建物以外を大会会場とする場合は、近隣の建物が当該の日時に工事に入らないかを確認しておく必要がある、というシンプルな事実を記録しておきたかったからです。

ワイヤレスマイクの電池が切れる等のハプニングでご迷惑をおかけする点もありましたが、実行委員の会員各位、サポートスタッフとして頑張ってもらった会員各位、それに学生諸君の機転のきいた素早い判断と熱い思いの全てに、大会を終えた今、深く感謝いたします。(高階美行)

【大会決算】

収入		支出	
大会開催費	300,000	通信費	106,340
大会参加費(事前・153)	153,000	要旨集等印刷代	236,930
大会参加費(当日・56)	112,000	消耗品費(文具・会場設営等)	91,251
懇親会費(正会員事前 86)	430,000	懇親会費	615,240
懇親会費(正会員当日 16+1)	102,000	2日目弁当代	94,000
懇親会費(学生会員事前 13)	52,000	公開イベント謝礼	50,000
懇親会費(学生会員当日 6)	30,000	学生アルバイト代	188,000
2日目弁当代	94,000		
年次大会特別基金より補填	108,761		
合計	1,381,761	合計	1,381,761

【託児所会計報告】

収入		支出	
受益者負担(2名)	10,000	ベビーシッター代	50,300
学会予算より補填	40,300		
	50,300		50,300

AJAMES 編集委員会報告

保坂修司

『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会よりご報告いたします。

1. 29-1号、29-2号編集中

現在、29-1号の編集作業は今年7月中の刊行を目指して大詰めに入っています。また29-2号につきましては6月1日に投稿を締め切りました。投稿数は、特集を除き、10本(英語は4本、アラビア語1本、日本語4本)でした。現在審査作業に入っているところです。

2. 次号締め切りのお知らせ

次号30-1号の締め切りは12月1日の予定です。論文、研究ノート、書評等さまざまなジャンルでの投稿をお待ちしております。とくに欧文での投稿を歓迎しております。

3. 博士論文要旨

AJAMES では会員による中東関連の博士論文要旨（英文）を掲載しています。とくに締め切りを設けておりませんので、最近博士論文を提出された会員のかたは、随時投稿をお願いいたします。また、お近くに中東関連で博士論文を提出されたかたがいらっしゃれば、ぜひ投稿を呼びかけてください。

4. 本年度編集委員会の体制

本年度の編集委員会は以下のような体制になりました（敬称略、50音順）。青柳委員、土屋委員、また韓国から KIM Joong-Kwan 委員、SONG Kyung-Keun 委員が新たに編集委員会に加わりました。

編集委員長：保坂修司

副編集委員長：粕谷元、林佳世子

編集委員：青柳かおる、阿部るり、池田美佐子、近藤信彰、土屋一樹、縄田浩志、藤元優子、堀井優、松永泰行、山尾大、横田貴之

海外委員：Dale F. EICKELMAN、R. Stephen HUMPHREYS、KIM Joong-Kwan、Abdul Karim RAFAQ、SONG Kyung-Keun

また編集委員会連絡先は、以下の通りです。

〒104-0054 東京都中央区勝どき 1-13-1 イヌイビル・カチドキ
一般財団法人 日本エネルギー経済研究所 中東研究センター
保坂修司宛

電話：03-5547-0230（代） ファックス：03-5547-0229

電子メール：james-editor@tufs.ac.jp / ajames-editor@james1985.org

—— おわびと訂正 ——

先般ニューズレター（No.131）に「年報（AJAMES）編集委員会連絡先の変更」（p.6）ということで、電子メールのアドレスが、

ajames-editor@tufs.ac.jp

にかわったとお伝えしましたが、これは編集委員会側のミスで、正しくは従来どおり、

ajames-editor@james1985.org

でした。おわびのうえ訂正させていただきます。まことに申し訳ございませんでした。電子メール宛先に関しましては混乱を避けるため、上記のとおり、当面のあいだ、ajames-editor@james1985.org と ajames-editor@tufs.ac.jp の両方を併用し、ajames-editor@james1985.org に統一する際には再度連絡することといたします。

5. CiNii 閲覧状況

国立情報学研究所論文情報ナビゲーター（CiNii）を通じた2011年1月から2013年5月までの本誌の閲覧件数は下記のとおりです。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
2011年	356	177	101	387	554	446	631	153	316	519	608	482	4730
2012年	413	304	232	344	554	537	572	311	231	472	473	633	5076
2013年	475	177	131	436	483								1702

第4回日本中東学会奨励賞の選考結果

審査委員長 私市正年

NUKII Mari

“Protest Events in the Tehran Bazaar during the Oil Nationalization Movement of Iran,”
AJAMES, 28-1.

貫井万里氏の論文は、イランの石油国有化運動に参加したバーザール商人の実態を、ペルシア語新聞の抗議運動の事例分析から明らかにしたもので、バーザール商人の多数派を占めるアスナフ連盟（中小商人・職人）の政治参加志向が運動参加の大きな動機であったこと、しかしアスナフ連盟（中小商人・職人）とアスナフ連合（富裕な貿易商や企業家）との潜在的対立が、後者をモサッデク政権打倒工作へと動かしたことを解明し、政変後の政治動向をも明らかにした。本論の分析視点と実証方法は国際的にも十分な価値のある論文である。よって貫井氏を日本中東学会第4回奨励賞の受賞者として選出した。

日本中東学会奨励賞を受賞して

貫井 万里

このたびは、日本中東学会奨励賞を頂き、どうもありがとうございます。中東研究を志してから、約20年近くになりますが、長年にわたって、中東研究へと誘い、研究指導をして下さった先生方、中東研究の楽しさを共有し、互いに励ましあってきた友人たちに心から感謝しております。多くの方々に支えて頂いたおかげで、このような貴重な賞を思いがけず頂くことができ、研究をあきらめなくて本当に良かったと思っております。

今回、受賞の対象となった“Protest Events in the Tehran Bazaar During the Oil Nationalization Movement of Iran”（『日本中東学会年報』第28-1号2012年7月掲載）では、1950年代イランの石油国有化運動期に、テヘランのバーザールで働く人々の抗議行動をイベント分析という手法を援用して、ペルシア語の新聞を分析しました。本稿は、2003年にアメリカのイースタン・ミシガン大学留学中に分析を始め、2007年に博士論文の一部として提出した論文を改稿したものです。2004年の冬、この論文の基となった資料収集のために、シカゴ大学に向かう途中、グレイハウンドのバスが、雪の降るミシガン湖沿いの高速道路で2回エンストし、最後には運転手の居眠り運転で、交通事故に遭いそうになったことを思い出します。その際、バスの乗客が「こんなひどいバスは第三世界なみだ！」と怒って怒鳴ったのに対し、よほど快適なイランのバスに思いを馳せ、アメ

リカ社会の貧富の格差を実感したものです。本稿を雑誌論文の形にするまで、約10年もかかりましたが、いつも温かく励まして下さり、論文を精読して有益なアドバイスを下さった博士論文の主査の坂本勉先生並びに副査の先生方、そして山形大学の濱中新吾准教授、プリンストン大学のEric Lob氏、研究会での報告の際に貴重なコメントを下さった皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

受賞を励みにして、これからも中東研究を続けていきたいと思っております。今後とも引き続きご指導下さいますようよろしくお願い申し上げます。

「片倉もとこ先生を偲ぶ」

岩崎えり奈

2月23日、片倉もとこ先生が逝かれた。しかし、そのことを知ったのは3月に入ってからである。片倉邦雄先生からいただいたお便りには、3月2日にご家族を中心に密葬を終えられたとあり、次のメッセージが書かれていた。

「おげんきで、おすごしのこととおもいます。今後しばらくは、わたしへの郵便その他は、おおくりくださいませ。実はわたし人生最後のフィールドワークにでかけることにいたしました。パソコン環境もよくないところで、ましてや、郵便もとどきません。帰国いたしましたら、ご報告もうしあげます。どうぞ、おからだ、おこころ、お元気で 片倉もとこ」

私自身は片倉もとこ先生のご指導を直接受けたことはない。にもかかわらず、片倉邦雄先生から上記のお便りをいただいたのは、去年12月6日に共立女子大学で開催された公開講演会でのご縁にある。昨年、共立女子大学で「イスラーム世界の女性たち」という公開講演会を企画することになり、昨年1月に片倉もとこ先生にご連絡差し上げた。某先生に相談したところ、スケールと迫力のある女性研究者なら片倉もとこ先生が一番であろうと薦められたこともあり、女子学生たちにパワーを与えてくれる講演をお願いしたいと思ってのことであった。もっとも、片倉もとこ先生は雲の上の大先生であったから、恐る恐るご連絡差し上げたところ、社会貢献のためならと、快く引き受けてくださった。

片倉もとこ先生にお願いしようと思った理由はもう一つある。共立女子大学では、グループ・ディスカッションを中心にしたEQIQ入試を行っているが、2010年の入試で片倉もとこ先生の『イスラームの日常世界』がその指定図書になった。このご著書は、学生だけでなく教員のあいだでも好評で、一時、片倉もとこ先生がつくられたことばである「ゆとろぎ」を意味するアラビア語の「ラーハ」が学生や教員とのあいだで流行語になったほどであった。たとえば、ゼミや会議でいらいらするときなど、「ラーハ」、「ラーハ」とお互いに言い合ったものである。

さて、講演会の6日前に、秘書の藤本悠子さんと片倉邦雄先生から、片倉もとこ先生が入院され、講演をできないかもしれないのご連絡を受けた。しかし、大変なご病状を押して来てくださったと知ったのは最後のご著書『旅だちの記』(中央公論新社)を読んだときであったが、当日、予定どおり来てくださった。講演会には多くの学生

や学外の方々を含め 190 人ほどの聴衆が集まり、大成功であった。お話は、ご自身の生き方からイスラーム世界における男女や夫婦のありようにおよび、ウィットを交えた関西弁でのお話に、聴衆は熱心に耳を傾けた。後日、学生たちに感想を書いてもらったところ、「みられる女性」よりも「みる女性」というお話、そして「人生とは死ぬまで学ぶこと」というお話が学生たちにとってとくに印象深かったようだ。

5月13日、サウジアラビア大使館で「片倉もとこさん愛蔵カーペット贈呈式」が行われた。その式において、公私にわたる多くの知人・友人が思い出を語る中で、中東研究者仲間であり、同じ文化人類学的手法で調査を行ってきた宮治美江子さんは、片倉もとこ先生はすぐれたフィールドワーカー、それもきわめて「先見の明のあるフィールドワーカー」だった、と述懐した。また、栗田禎子さんも、片倉もとこ先生の特徴として、華やかなだけでなく、骨太の、スケールの大きな世界観を持っていたこと、フィールドワークを通じて自らの生き方自体を鍛え上げていくタイプの研究者であり、知識だけでなく生き方を教えることのできる人だったと指摘した。

講演の冒頭で、片倉もとこ先生は「人生の最後を、どんなエンドをむかえられるかな、おもしろいなあと思って見てるんです。みなさまも、運よくわたしが演壇でたおれたら、人間はああいうふうに住むんだと学んでください」（『旅だちの記』306頁）とお話なさったが、まさにフィールドワーカーとしての生き方を最後まで実践なさった。ご冥福を心よりお祈り申し上げるとともに、中東地域研究に片倉もとこ先生のフィールドワークの志が受け継がれることを切に願いたい。

会員の異動

【新入会員】

Nassr Qolamreza

Khalil Dahbi

高木 美希

山本 沙希

片山 能輔

寄贈図書

【単行本】

菅原由美『オランダ植民地体制下ジャワにおける宗教運動：写本に見る19世紀インドネシアのイスラーム潮流』大阪大学出版会、2013年

歴史学研究会編『歴史学のアクチュアリティ』東京大学出版会、2013年

三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会 基礎データと研究案内（増補版）』SOIAS Research Paper Series 9、共同利用・共同研究拠点イスラーム地域研究拠点・上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究機構、2013年。

粕谷元・多和田裕司編著『イスラーム社会における世俗化、世俗主義、政教関係』SOIAS Research Paper Series 10、共同利用・共同研究拠点イスラーム地域研究拠点・上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究機構、2013年。

日本西アジア考古学会『平成24年度考古学が語る古代オリエント——第20回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、2013年。

日本大学生物資源科学部国際地域研究所『家畜と野生動物の共通伝染病に対する早期警報システムの構築』龍溪書舎、2013年。

塩谷昌史・家田修・柳澤雅之編『地域研究と自然科学の協働 広域アジアの地域研究を例に』JCAS Collaboration Series 6、地域研究コンソーシアム、2013年。

中島成久・西芳実編『原発震災被災地復興の条件 ローカルな声』JCAS Collaboration Series 7、地域研究コンソーシアム、2013年。

【逐次刊行物】

『上智アジア学』第30号、2012年。

『地域研究』Vol. 13, No. 1, 2. 2013年

『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第27巻、岡山市立オリエント美術館、2013年。

『季刊アラブ』No. 145、日本アラブ協会、2013年。

『地域研究コンソーシアム・ニューズレター』No. 14. 地域研究コンソーシアム事務局、2013年3月。

Perceptions: Journal of International Affairs. Vol. XVII, No. 4 (Winter 2012). The Center for Strategic Research of the Ministry of Foreign Affairs (SAM), Turkey, 2012.

Dimensions International. Saudi Aramco, Winter 2012.

事務局より

年次大会を無事に終えることができ、学会事務局としてもほっとしているところです。高階美行委員長や近藤久美子事務局長をはじめとする大会実行委員会の諸先生方ならびに開催校の関係の方々には厚く御礼申し上げます。学会事務局の方はといえば、仕事を引き継いだばかりということもあって、各方面にあれこれとご迷惑をおかけしました。来年度に向けてこの経験を生かしていきたいと思っております。

2年ぶりに名簿を更新しました。会員数が減少傾向であるのは気になるのですが、会員の専門領域がいつそう多様化し、日本の中東研究の幅がさらに広がりつつあるのを実感しました。(山口 昭彦)

編集後記

例年のことですが、7月号は年次大会報告と総会報告により大分なものとなりました。今回、初めてその編集を担当し、改めて学会運営が多くの方々を支えられていることを実感しました。各方面にわたる執筆者の方々に、この場をお借りして御礼申し

上げます。ありがとうございました。

ニューズレターは電子化されたのですが、特に年次大会報告を楽しみにされている方々がおられるということで、この7月号のみ、学会名簿とともに郵送することとなりました。通常通りにネット配信した後、発送いたします。分量が多いため、印刷紙面のほうが読みやすいかと思います。ご一読といわず、ディスプレイと紙面でご二読いただければ幸いです。よろしく申し上げます。(松本弘)

会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。会費に未納がある方は、本号のニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。納入済の年度がお分かりにならない場合は、事務局まで気軽にお尋ねください。AJAMES に未送付分がある場合は、2012 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。会費納入率は低い状態が続いており、学会事務局の運営にも支障を来しかねない状況です。是非ともご協力いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

日本中東学会ニューズレター 第132号

発行日 2013年7月28日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒150-8938
東京都渋谷区広尾 4-3-1
聖心女子大学
山口昭彦研究室内
日本中東学会事務局
電話：03-3407-5685（直通）
電話・ファックス：03-3407-5613（史学研究室）
Eメール: james@james1985.org
<http://www.james1985.org>
郵便振替口座：00140-0-161096（日本中東学会）
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店（普）5346808
（日本中東学会 代表 栗田 禎子）